小品集

キプリアヌス
藤遥　制作

ドナトゥスへ　1〜5章　新しく生まれること

1:1 親愛なるドナトゥスよ、よく思い出させてくれました。約束したことは、わたしも覚えています。それを果たすには、今こそまさにふさわしい時です。ぶどうの取り入れが休みを許してくれて、精神はほどかれ、安らぎに向かいます。人を疲れさせる一年のうちに、毎年決まって訪れる休戦の時を得るのです。1:2 場所も、この日にかなっています。心地よい秋のやわらかなそよ風のもとで、庭の美しいながめも、感覚をなだめ、いたわるのにふさわしいものです。ここでなら、語らいながら楽しく一日を過ごせます。学ぶことに向かう語らいによって、胸のうちの良心を神の教えへと育てることもできます。1:3 信仰を知らない者に立ち聞きされて、わたしたちの語らいが妨げられてはなりません。騒がしい召使いたちの遠慮のない叫びに邪魔されてもいけません。ですから、この席に移りましょう。近くの人目につかない所が、引きこもる場を与えてくれます。そこでは、ぶどうのつるが気ままに垂れ下がり、揺れる絡みを作りながら、支えの葦を伝って這っています。そうして葉の屋根が、ぶどうの柱廊を作っているのです。1:4 ここなら、学ぶことに耳を傾けるのにちょうどよいのです。木々やぶどうを眺めながら、楽しいながめで目を和ませます。そうして、聞くことが魂を教え、見ることが魂を養うのです。とはいえ、今のあなたにとって、楽しみも関心も、ただ語らいだけにあります。目を楽しませるながめの誘いには構わず、わたしにじっと目を注いでいます。口でも、思いでも、すっかり聞き手になっています。わたしを愛してくれる、その愛をもってです。

2:1 とはいえ、わたしからあなたの胸に届くものが、どんなもの、どれほどのものでしょうか。乏しい才のささやかな力は、ごくわずかな実りしか生みません。肥えた土地の穂のように、豊かに重く実ることはないのです。それでも、できるかぎりの力で取りかかりましょう。語る題材そのものも、わたしに味方してくれるからです。2:2 法廷や演壇でなら、豊かな弁舌が、よどみなく人気を求めて誇示されてもよいでしょう。しかし、主について、神について語るときには、声の混じりけのない誠実さは、雄弁の力に頼りません。信仰を証しするのに、事実そのものに拠り頼むのです。2:3 ですから、受け取ってください。巧みな言葉ではなく、力のある言葉です。聴衆の気を引くために、飾った言葉で装ったものでもありません。神のいつくしみを宣べ伝えるために、ありのままの真実で語る、飾りのない言葉です。受け取ってください。学ぶより先に感じ取られるものです。時間をかけ、長い年月をかけて知ることで集められるものではありません。早く実らせる恵みによって、一息に汲み取られるものです。

3:1 わたしはかつて、闇の中、何も見えない夜の中に横たわっていました。揺れ動く世の荒波の上を、よろめき迷いながら、さまよう足取りで漂っていました。自分のいのちのことも分からず、真理と光から遠く離れていました。そのころ、神のいつくしみは、わたしの救いのために、あることを約束していました。人がもう一度新しく生まれることができる、というのです。救いの水の洗いによって新しいいのちに生かされ、以前の自分を脱ぎ捨てることができる。体の組み立ては同じままでも、精神と思いにおいて人が変わることができる、というのです。当時のわたしの生き方からすれば、それはまったく難しく、厳しいことに思えました。3:2 わたしはこう言っていました。それほど大きな転換が、どうしてありうるでしょうか。生まれつきの性質は、生来の素材の中で長く放っておかれて固まっています。長く身につけた習いは、年を経て古びるうちに根を下ろしています。それを、たちまち、すばやく脱ぎ捨てることなど、どうしてできるでしょうか。これらは深く、奥底まで根を張って居座っているのです。3:3 宴の食卓とふんだんなごちそうに慣れた人が、いつ倹約を学ぶでしょうか。高価な衣で人目を引き、金と紫の衣に輝いていた人が、いつ庶民の質素な身なりにまで身を落とすでしょうか。3:4 権標と栄誉を楽しんできた人は、ただの人として、誉れなしに生きることはできません。取り巻きの群れに囲まれ、仕える者たちの行列を大勢引き連れて、面目を施してきた人もいます。その人は、ひとりでいることを罰の

ように思います。3:5 いつまでも離れない誘惑によって、これまでどおり、酒が誘い、高ぶりがふくらませるのは避けられません。怒りが燃え上がらせ、強欲が落ち着かなくさせ、残酷さがかき立てます。野心が喜ばせ、情欲がまっさかさまに突き落とします。

4:1 こうしたことを、わたしはよく自分に言い聞かせていました。わたし自身、以前の生活のとても多くの迷いに絡みつかれていたからです。それを脱ぎ捨てられるとは、信じられませんでした。そのため、まといつく悪徳の言いなりになっていました。もっと良いものに望みを失っていたので、自分の悪を、もう家で生まれ育った自分のもののようにみなしていました。それをかばってさえいたのです。4:2 しかし、新たに生む水の助けによって、それまでの年月の汚れが洗い去られました。清められた純な胸に、上から光が注ぎ込みました。天から霊を吸い込み、第二の誕生がわたしを新しい人に造り直しました。すると、不思議なことに、たちまち、疑わしかったことが確かになりました。閉ざされていたものが開き、暗かったものが輝きました。前には難しく思えたことが、できるようになりました。できないと思っていたことが、行えるようになったのです。こうして、はっきり分かりました。以前、肉において生まれ、罪に縛られて生きていたものは、地のものでした。今、聖霊が生かしておられるものは、神のものとなり始めたのです。4:3 あなたも確かに知っていて、わたしと一緒に思い返しているはずです。罪が死に、徳が生きたこのことが、わたしたちから何を取り去り、何をもたらしたかを。あなた自身が知っているので、わたしは言い立てません。自分をほめるための自慢は、いやなものです。とはいえ、人の力に帰されず、神の賜物として語られることは、自慢ではなく、感謝でありえます。こうして、もう罪を犯さないことは信仰のものとなり始め、以前に犯した罪は人間の迷いのものだったことになります。4:4 そうです、わたしたちにできることはすべて、神のもの、まさに神のものなのです。そこから、わたしたちは生き、そこから力を得ています。そこから活力を受けて身に宿し、まだこの地にいながら、来るべきもののしるしを前もって知るのです。ただ、恐れが潔白の番人となりますように。主は、天のいつくしみを注ぎ込んで、あわれみ深くわたしたちの思いに流れ込んでくださいました。その主を、正しい行いによって、喜ぶ精神の宿にお引き留めできますように。受けた安心が怠りを生み、古い敵がまた忍び寄ることのないためです。

5:1 さて、あなたが、すべることのないしっかりした足取りで、潔白の道、義の道を歩み続けるとします。また、力のかぎり、心をつくして神により頼み、なり始めたとおりの者であり続けるとします。そうすれば、霊の恵みが増すだけ、あなたの自由も与えられます。5:2 地上の施しなら限りがあるのが常ですが、神からの賜物を受けるのには、量の限りも、程度の限りもないのです。霊は豊かにあふれ出て、どんな境にも押しとどめられません。閉じ込める柵によって、決まった区画の中に抑えられることもありません。5:3 霊は絶えず流れ、あふれるほど満ちています。ただ、わたしたちの胸が渇き、開いていればよいのです。受け入れる信仰をそこへどれだけ携えていくか、その分だけ、わたしたちはあふれる恵みを汲み取るのです。そこから、さらに力が与えられます。慎み深い純潔と、まっすぐな思いと、清い声とをもって、苦しむ人々をいやすために、毒の害を消すことができるのです。正気を失った精神の汚れを、健やかさを取り戻させて清めることができます。敵意を抱く者には平和を、荒々しい者には静けさを、猛り立つ者には穏やかさを命じることができます。汚れた霊、さまよう霊は、人々を攻め落とそうとして、その中に潜り込んでいます。その霊どもを、脅して叱りつけ、告白へと追い込むことができます。激しく打ちたたいて、出て行かせることができます。もがき、泣きわめき、うめく霊どもを、長引く罰を増し加えて引き伸ばし、鞭で打ち、火で焼くことができるのです。5:4 そこでは事が行われていますが、目には見えません。打つ手は見えず、罰だけがはっきり見えるのです。こうして、わたしたちがすでになり始めたものにおいては、受けた霊がその自由を存分に使います。しかし、まだ体と肢体は変わっていないので、肉の目は、なお世の雲にさえぎられて見えないのです。5:5 ここには、精神のなんと大きな支配の力があることでしょう。なんと大きな力でしょう。精神そのものが、世界の害ある接触から引き離されるだけではありません。清められた純な人は、襲いかかる敵のどんな汚れにも捕らえられないのです。それどころか、精神はさらに大きくなり、力においてもっと強くなります。そして、荒れ狂う敵対者の全軍勢を、命令する権威をもって支配するのです。

ドナトゥスへ　6〜10章　高みから見下ろす世

6:1 さて、真理を明らかにして、神の賜物のしるしがいっそうはっきり輝き出るようにしましょう。あなたが知ることができるように、光を差し出します。悪の闇をぬぐい去り、覆われた世の暗がりをあらわにしましょう。しばらくのあいだ、険しい山のひときわ高い頂に、自分が連れて行かれたと思ってください。そこから、下に横たわるものの姿を見渡してください。目をあちこちに向けながら、あなた自身は地上のものに触れずにいて、揺れ動く世界の渦巻く嵐を見つめてください。そうすれば、あなたも世をあわれむでしょう。そして自分の身を顧み、神にいっそう感謝して、そこから逃れ出たことを、ひときわ大きな喜びをもって祝うでしょう。6:2 見てください。道は盗賊にふさがれ、海は海賊に囲まれています。戦争は、陣営の血なまぐさい恐ろしさを伴って、いたるところに散らばっています。世界は、互いに流し合う血に濡れています。人殺しは、ひとりひとりが犯せば罪です。ところが、公に行われると、武勇と呼ばれるのです。悪事に罰を免れさせるのは、潔白であるという理由ではありません。残酷さの大きさなのです。

7:1 次に、町々そのものに目と顔を向けてみるなら、どんなさびしさよりも陰気なにぎわいに出会うでしょう。剣闘士の見世物が用意されます。残酷な目の欲を、血が楽しませるためです。体は精のつく食べ物を詰め込まれて、肉づきを増します。手足の頑丈な塊は、脂の盛り上がりで太らされます。罰のために家畜のように肥やされた者が、より高い値で死ぬためです。7:2 人が、人の楽しみのために殺されます。人を殺せるようになるための熟練があり、修練があり、技術があります。悪事は行われるだけでなく、教えられもするのです。これより非道なこと、これよりむごいことを、何か言えるでしょうか。7:3 人を殺せるようになるための規律があり、殺すことが誇りになっています。お尋ねしますが、あれはいったいどういうことでしょうか。誰にも罪に定められていないのに、獣の前に身を投げ出す者たちがいます。若い盛りで、見た目もなかなか美しく、高価な衣を着ています。7:4 生きたまま、自分から進んで受ける葬りのために飾り立てられるのです。みじめな者たちは、自分の不幸を誇ってさえいます。罪のためではなく、狂気のために、獣と戦います。父親たちが、自分の息子を見物します。兄弟は観客席にいて、姉妹もそこに居合わせます。剣闘士の試合の支度がいっそう気前よく整えられれば、見世物の代金はつり上がります。それでも、母親は自分の嘆きの場に立ち会うために、ああ、なんと悲しいことに、その代金まで払うのです。7:5 そして、これほど不敬な、これほど恐ろしい見世物にいながら、自分たちが目で身内を殺しているとは思わないのです。

8:1 ここから、別の見世物に顔を向けてください。その汚れも、劣らず嘆かわしいものです。劇場でも、あなたは悲しく、恥ずかしくなるものを目にするでしょう。悲劇の厚底靴が務めるのは、昔の悪事を詩で語り直すことです。身内殺しや近親の交わりについての昔の恐ろしい出来事が、本当にあったことに似せた演技で繰り返されます。かつて犯されたことが、時代が移るうちに忘れられることのないためです。8:2 どの世代の人も、耳で聞いて、かつて行われたことは今も行われうると教えられます。罪は年月を経て老いても、決して死にません。罪が時の流れに埋もれることも、悪事が忘却に葬られることも、決してありません。もう行われなくなった昔の悪事が、手本になるのです。8:3 それから笑劇では、恥ずべきことの手ほどきを受けて楽しみます。家でしたことを見て思い当たったり、これからできることを聞いたりするのです。姦淫は、見ているうちに学ばれます。公に認められた悪が、悪徳へと取り持つのです。そのため、ひょっとすると貞潔な女として見世物に出かけた奥方が、見世物からは貞潔を失って帰って来ます。8:4 さらにまた、役者の身ぶりに汚されることがあります。生まれの定めと掟に逆らい、汚れた恥ずべきことを受け入れるよう仕込まれたさまを見ることがあります。それは、品行のなんと大きな汚れでしょう。恥ずべきことのなんという火種、悪徳のなんという糧でしょう。男たちは男らしさを奪われます。性の

誉れも活力も、骨抜きにされた体の恥によって、すっかり柔弱にされます。そこでは、男を女へと砕いた者ほど、喜ばれるのです。8:5 その役者は、罪によってほめそやされ、恥ずべき者であるほど巧みだと評されます。ああ、なんと非道なことに、こういう者が見物されるのです。それも喜んでです。こういう者に、言いくるめられないことがあるでしょうか。感覚を揺さぶり、心の動きをくすぐり、善良な胸のしっかりした良心さえ攻め落とします。甘く誘う恥ずべきことには、権威の後ろ盾も欠けていません。それで、耳あたりのよいものを通して、破滅が人々に忍び寄るのです。8:6 彼らが演じてみせるのは、恥知らずなウェヌス、姦淫するマルス、そして彼らのあのユピテルです。ユピテルは、王の位より悪徳においてこそ第一の者です。自分の雷を持ったまま、地上の恋に燃えます。あるときは白鳥の羽毛となって白くなり、あるときは黄金の雨となって降り注ぎます。またあるときは鳥を手下にして、年ごろの少年たちをさらいに飛びかかります。8:7 さあ、尋ねてみてください。見物する者が、清いままでいられるでしょうか。貞潔でいられるでしょうか。その人は、自分の拝む神々をまねるのです。こうして、みじめな者たちにとっては、罪までもが信心のわざになります。

9:1 ああ、あなたがあの高い見張り場に立ったまま、隠れた所にも目を差し入れることができたらと思います。寝室の閉ざされた戸を開け、奥の隠れ場をあばいて、目に見せることができたらと思います。そうすれば、恥知らずな者たちが、慎みのある顔なら見ることもできないことを行っているのが見えるでしょう。見ることさえ罪であることが見えるでしょう。悪徳の狂気に正気を失った者たちが、したことは否定しながら、するのには急いでいることが見えるでしょう。9:2 狂った情欲のままに、男が男に向かって突き進みます。する者自身にさえ快く思えないことが行われるのです。わたしの言うことが偽りでなければ、こういう者こそ人を責めます。恥ずべき者が、恥ずべき者たちの悪評を立てます。そして自分では知っていながら、逃れおおせたと思っています。まるで、自分の良心が知っているだけでは足りないかのようにです。9:3 同じ者たちが、人前では告発する者、陰では罪ある者です。自分自身に対しては、監察官でありながら罪ある者でもあります。内でしていることを、外では責めます。喜んで犯しながら、犯したそのことを非難するのです。9:4 まったく、悪徳にふさわしい厚かましさであり、恥知らずな者たちに似合いの不遜さです。こういう者たちが口にすることに、驚かないでください。あの口にとっては、声で犯す罪は、なんであれ、まだ軽いほうなのです。

10:1 しかし、あなたは、危険な道、世界じゅうに散らばる数々の戦い、血なまぐさい見世物や恥ずべき見世物を見てきました。情欲の恥ずべき行いも見てきました。それは売春宿で人目にさらされることもあれば、家の壁の内に閉じ込められていることもあります。その罪は、隠れていればいるほど、厚かましさが大きいのです。それらを見た後では、公の広場ならきっと汚れを免れている、とあなたには思えるかもしれません。そこは、さいなむ不正から自由で、悪のどんな接触にも汚されていない、というわけです。10:2 そこに目を向けてください。そこには、忌み嫌うべきものがもっと多く見つかり、ますます目をそむけたくなるでしょう。法は十二枚の板に刻まれ、掟は公の銅板に掲げて示されています。それでも、法そのもののただ中で罪が犯され、掟のただ中で罪が行われます。潔白は、それが守られるはずの場所でさえ、保たれていません。10:3 争う者たちの憤激が互いに荒れ狂います。トガをまとった人々のあいだで平和は破られ、広場は訴訟で狂ったようにどよめきます。そこには競売の槍も、剣も、死刑執行人も控えています。えぐる鉄の爪、引き伸ばす拷問台、焼き尽くす火があります。人の一つの体に、手足の数より多くの責め苦があるのです。10:4 こうした中で、いったい誰が助けてくれるでしょうか。弁護人でしょうか。しかし、弁護人は相手と通じて欺きます。裁き手でしょうか。しかし、裁き手は判決を売ります。罪を罰するために座る者が、罪を犯すのです。そして、訴えられた無実の者が滅びるために、裁き手が罪ある者となるのです。10:5 罪がいたるところで燃え上がっています。あらゆる形の罪の犯し方で、邪悪な思いを通して、害をなす毒があちこちで働いています。ある者は遺言書をすり替え、ある者は死罪にあたる詐欺で偽の文書を書きます。ここでは子供たちが相続から締め出され、あちらでは他人に財産が与えられます。敵は罪をでっちあげ、中傷する者は攻め立て、証人は悪評を立てます。10:6 どちらの側でも、偽りの訴えを並べ立てるために、身を売った声の、金で買われる厚かましさがはびこっています。その間、罪ある者は、無実の者とともに滅びることさえありません。法を恐れる者はなく、審問官や裁き手を

こわがる者もいません。金で済ませられるものは、恐れられないのです。10:7 今では、罪ある者たちの中で罪がないことが、罪になっています。悪人をまねない者は、誰でも人の気を害します。掟は罪と手を結び、公に行われることが許されたことになり始めました。そこに、なんの恥じらい、なんの清さがありうるでしょうか。悪人を罪に定める者はおらず、罪に定められるべき者ばかりが、あなたの目に入るのです。

ドナトゥスへ　11〜16章　ただ一つの確かな安らぎ

11:1 もっとも、わたしはことさら悪いものばかりを選んでいる、と思われるかもしれません。けなしたい一心で、あなたの目をそういうものの間に引き回している、というわけです。たしかに、その陰気で目をそむけたくなる光景は、よりよい良心を持つ者の口と顔をしかめさせます。では今度は、世の無知が良いものと思い込んでいるものを、あなたに見せましょう。11:2 そこにも、逃れるべきものが見えるでしょう。あなたは栄誉や権標を、富のあり余る豊かさや陣営での権勢を、良いものと思っています。政務官の紫の衣のきらびやかさや、支配の座のほしいままな権力もそうです。そこには、甘く誘う悪の毒が隠れています。ほほえみかける邪悪の顔は、なるほど晴れやかです。しかしそれは、ひそんだ災いの、心を誘う欺きなのです。11:3 それは毒のようなものです。死をもたらす汁に、欺くための巧みさで甘みを振りかけ、味に細工をすると、口にするものは、ただの飲み物に見えます。けれども飲み干してしまうと、飲み込んだ破滅が体じゅうを荒らし回るのです。11:4 たとえば、あの人を見てください。ひときわ目立つ衣で人目を引き、紫の衣を着て輝いているつもりでいます。しかし、輝くために、どれほど卑しい思いをしてそれを買ったことでしょう。それより前に、どれほど多くの高慢な者たちの尊大さを耐え忍んだことでしょう。朝のあいさつ回りの客として、どれほど多くの横柄な門の前に詰めかけたことでしょう。取り巻きの群れにもまれながら、どれほど多くの思い上がった者たちの、人を見下す足取りの先に立って歩いたことでしょう。それは後に、自分もあいさつを受け、供の行列に先導してもらうためでした。その行列が仕えるのは、人ではなく権力なのです。11:5 その人が敬われたのは、人柄のためではなく、権標のためだったのです。ついには、こういう人々の恥ずべき末路を見ることになるでしょう。時勢をうかがってこびへつらう者が、去って行きます。付き従っていた者は見捨てて、ただの人となった者の無防備な脇腹を辱めます。そのときになって、引き裂かれた家の傷が、良心を打ちます。そのときになって、使い果たした家の財産の損失が知れるのです。その財産で群衆の好意が買われ、移ろいやすくむなしい願いをかけて、民衆の人気が求められたのでした。11:6 まったく愚かで、むなしい浪費です。民衆は受け取りもせず、政務官は失うだけのものを、期待を裏切る見世物の楽しみで手に入れようとしたのですから。

12:1 また、あなたが金持ちと思っている人々もそうです。彼らは牧地に牧地をつなげ、隣り合う土地から貧しい人々を締め出して、果てしなく境のない畑をさらに広げます。銀と金をおびただしい重さで持ち、莫大な金銭を山と積み上げ、あるいは地に埋めて蓄えています。そういう人々もまた、自分の富のただ中でおびえ、定まらない思いの気苦労にさいなまれています。盗賊が荒らしはしないか。刺客が襲いはしないか。自分より富む誰かの敵意あるねたみが、言いがかりの訴訟で騒ぎを起こしはしないか。12:2 その人は、安心して食べることも、眠ることもできません。宴席でも、ため息をつきます。たとえ宝石の杯で飲んでもです。ごちそうでぐったりした体を、柔らかな寝台が深いくぼみに沈めても、羽ぶとんの上で眠れずにいます。みじめな人は気づかないのです。それらが自分にとって、きらびやかな責め苦にすぎないということに。自分は黄金に縛られて捕らえられ、持つよりもむしろ持たれているということに。そして、ああ、なんと忌まわしい思いの盲目、狂った欲のなんと深い闇でしょう。その人は、自分の荷を下ろし、重荷から身を軽くすることができます。それなのに、悩みの種の財産の上に、なおも覆いかぶさり続けます。罰となる積み荷に、なおも頑固にしがみつき続けるのです。12:3 そこから取り巻きにふるまいが配られることはなく、乏しい人々に分け与えられることもありません。彼らはそれを自分の金と呼びます。ところが、他人の金のように家に閉じ込めて、気苦労を重ねて番をしているのです。そこから友にも子供にも、何一つ分けません。ついには、自分自身にさえ分けません。彼らが持つのは、ただ他人に持たせないためだけです。そして、ああ、名と中身がなんと食い違っていることでしょう。彼らはそれを「良いも

の」と呼ぶのです。そこから悪いことのほかには、何の役にも立てないというのに。

13:1 それとも、あの人々なら安全だと思いますか。少なくともあの人々は、栄誉のしるしの帯と豊かな富に囲まれて、揺るがない堅固さで安心していられると思いますか。王の宮廷の輝きに照らされて光り、寝ずの番をする武器の警護が取り巻いている人々です。13:2 彼らの恐れは、ほかの人々より大きいのです。その人は、恐れられるのと同じだけ、恐れずにはいられません。高い地位は、権力のある者からも、同じように罰を取り立てます。たとえ護衛の一団に囲まれ、大勢の供で脇を固めて守っていても、そうなのです。13:3 その人は、下にいる者たちを安心させておきません。それと同じだけ、その人自身も、安心していられないのが道理です。権力は、自分が恐ろしい者に仕立てた当の人々を、まず脅かすのです。権力がほほえむのは荒れ狂うため、こびるのは欺くため、持ち上げるのは突き落とすためです。13:4 それは、害を生む利息のようなものです。位と栄誉の元金が大きかったほど、取り立てられる罰の利子も大きくなるのです。

14:1 ですから、穏やかで頼りになる静けさはただ一つ、揺るがず堅固な安心もただ一つです。それは、人がこの騒がしい世の渦巻く嵐から引き出され、救いの港に錨を下ろして据えられることです。その人は、地から天へと目を上げます。主の賜物にあずかることを許され、思いにおいてすでに自分の神のそば近くにいます。ほかの人々が人の世で高く大きいと見るものは、何であれ、自分の見るところでは低く横たわっている、とその人は誇るのです。14:2 世より大きい人は、もはや世から何一つ求めることも、望むこともできません。からみつく世界の罠から解かれ、地上のかすから清められて、永遠の不死の光へと移されること。それは、なんと揺るがない、なんと動じない守りでしょう。尽きることのない良いものを備えた、なんと天的な守護でしょう。14:3 敵がかつてわたしたちに襲いかかり、どれほど陰険な破滅をもたらして荒れ狂ったかは、もう問いません。わたしたちは、これからなる者を、いっそう愛するよう促されます。かつての自分を知ることも、責めることも許されているのですから。14:4 そのためには、賄賂も、票集めも、腕力もいりません。人の世の最高の位や権力なら、骨の折れる苦労を積んで手に入れなければなりません。しかしこれは、神からの価なしの賜物で、しかもたやすいのです。14:5 太陽がおのずから輝き、昼が照らし、泉がうるおし、雨が露のように降り注ぎます。それと同じように、天の霊はみずからを注ぎ込むのです。魂は天を仰いで自分の造り主を知ると、太陽より高く、この地上のあらゆる権力より高くなります。そして、自分がそうだと信じるとおりの者となり始めるのです。

15:1 ただ、あなたは、天の兵役によって霊の陣営に、すでにしるしを付けられた人です。教えを損なわずに保ってください。信心深い徳によって、教えを慎み深く保ってください。祈りにも、読むことにも、絶えず励んでください。あるときはあなたが神と語り、あるときは神があなたと語られます。15:2 神が戒めをもってあなたを教え、整えてくださいますように。神が富ませた人を、誰も貧しくすることはできません。天の糧がひとたび胸を満たしたなら、もう乏しさなどありえません。15:3 もう、金をちりばめた格天井も、高価な大理石の板で覆われた屋敷も、あなたにはみすぼらしく見えるでしょう。むしろ手をかけて飾るべきは、あなた自身だと知るからです。主が神殿として住まわれ、聖霊が住み始められた家こそ、あなたにとってまさる家だと知るからです。15:4 この家を、潔白の絵の具で彩りましょう。義の光で照らしましょう。この家は、古びて衰え、崩れ落ちることは決してありません。壁の塗りや金が色あせて、汚れることもありません。上辺を塗り飾ったものは、すべて移ろいます。本当に持っているとは言えないものは、持つ者に確かな安心を与えません。15:5 この家は、いつまでも生き生きとした装いと、損なわれない誉れと、長く続く輝きをもってとどまります。消し去られることも、消えることもありえません。ただ、体が再び帰って来るとき、さらにすぐれたものへと形づくられるだけです。

16:1 親愛なるドナトゥスよ、ひとまずは手短に、ここまでにしておきます。救いになる話を聞くことは、たしかにあなたを喜ばせます。善良さから出る気安い忍耐、主にあって揺るがない思い、確かな信仰を持つあなたですから。主に喜ばれることほど、あなたの耳に喜ばしいものはありません。それでも、話すことは控えめにしなければなりません。わたしたちはこうして一緒にいて、これからもたびたび語り合うのですから。今は休みで、くつろいでいられる時です。日はもう夕べに傾いていますが、この日の残りを、喜んで過ごしましょう。食事の時さ

え、天の恵みと無縁にならないようにしましょう。16:2 しらふの宴に、詩篇の歌を響かせましょう。あなたは記憶が確かで、声もよく通ります。いつものように、この務めを引き受けてください。あなたは親しい友たちを、いっそうよくもてなせるでしょう。わたしたちが霊的なものを聞き、信仰の甘い調べが耳を引きつけるならです。

教会の一致について　1〜6章　ただ一つの教会

1:1 主は『あなたがたは、地の塩である』と勧めて言われます（マタイ五・一三）。また主は、潔白においては素直でありながら、その素直さのうちにも賢くあるようにと命じておられます（マタイ一〇・一六）。愛する兄弟たちよ、そうであれば、わたしたちのなすべきことは、ほかに何があるでしょうか。先を見通し、心を配って目を覚まし、陰険な敵のわなを見抜き、同時にそれに用心することではないでしょうか。父なる神の知恵であるキリストを身にまとったわたしたちが、救いを守ることにおいて知恵が足りないと見られないためです。1:2 恐れなければならないのは、迫害だけではありません。神の僕たちを覆し、打ち倒そうと、公然と攻めかかって荒れ狂うものだけでもありません。恐れるものがはっきりしているところでは、用心するのはたやすいのです。敵対者が自分から名乗り出るときには、精神も前もって戦いに備えられます。1:3 敵がいっそう恐ろしく、いっそう用心すべき者となるのは、ひそかに忍び寄るときです。平和の見せかけで欺き、隠れた近づき方で這い寄るときです。そこから敵は、「這うもの」、つまり蛇という名も受けたのです。これがいつも変わらない敵の狡猾さです。人を陥れるための、目に見えない、隠れひそんだ欺きです。1:4 こうして敵は、世界の初めに、すぐさま欺きました。偽りの言葉でへつらい、まだ何も知らない魂を、その用心のない信じやすさにつけ込んでだましたのです。こうして敵は、主ご自身をも試みようとしました。もう一度忍び寄って欺こうとするかのように、ひそかに近づいたのです。しかし敵は見破られ、はね返されました。見抜かれ、正体を暴かれたからこそ、打ち倒されたのです。

2:1 ですから、わたしたちには手本が与えられています。古い人の道を逃れ、勝利なさったキリストの足跡に従うことです。それは、用心を欠いて、再び死のわなに転げ落ちることがないためです。むしろ、危険に備えて先を見通し、受けた不死にあずかるためです。2:2 では、どうすれば不死にあずかることができるでしょうか。死を打ち負かし、征服するもの、すなわちキリストのいましめを守るほかにありません。キリストご自身が、こう勧めて言われます。『もし命に入りたいと思うなら、いましめを守りなさい』（マタイ一九・一七）。また、『あなたがたにわたしが命じることを行うならば、わたしはもう、あなたがたを僕とは呼ばず、友と呼ぶ』と言われます（ヨハネ一五・一四〜一五）。2:3 キリストは、そのような人々こそ強く、揺るがない者だと言われます。岩の上に力強い重みで据えられ、世のあらゆる嵐とつむじ風に対して、動かず揺るがない堅固さで固められた者だと言われます。キリストはこう言われます。『わたしの言葉を聞いて行う者を、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べよう』（マタイ七・二四）。2:4 『雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけた。しかし、倒れなかった。岩を土台としていたからである』（マタイ七・二五）。ですから、わたしたちはキリストの言葉に従わなければなりません。キリストがお教えになり、またなさったことは何であれ、学び、行わなければならないのです。2:5 それにしても、キリストがお命じになったことを行わない者が、どうして自分はキリストを信じていると言えるでしょうか。いましめに忠実であろうとしない者が、どこから信仰の報いにたどり着くというのでしょうか。2:6 そういう者は、ぐらつき、さまよわずにはいられません。迷いの霊にさらわれ、風に吹き払われるちりのように、吹き散らされずにはいられません。救いに至る道の真理を保たない者は、どれほど歩いても、救いへは進めないのです。

3:1 用心しなければならないのは、あからさまで、はっきりしたものだけではありません。狡猾なたくらみの巧妙さで欺くものにも、用心しなければなりません。キリストが来られたことで、敵は正体を暴かれ、打ち倒されました。光が異邦人に来て、救われるべき人々のために救いの光が輝き出たのです。耳の聞こえない人は、霊の恵みを聞き入れるようになりました。目の見えない人は、主に向かって目を開きました。弱っていた人は、永遠の健やかさによって力を取り戻しました。足の不自由な人は、教会へ走って行きました。口のきけない人は、はっ

きりした声で祈りをささげました。敵は、偶像が捨てられ、信じる民がおびただしく増えて、自分の座と神殿が見捨てられたのを見ました。そこで敵は新しいたくらみを考え出し、キリスト者という名そのものを看板にして、用心のない人々を欺こうとしたのです。これより狡猾で、これより巧妙なことがあるでしょうか。3:2 敵は異端と分裂を編み出しました。それによって信仰を覆し、真理を損ない、一致を引き裂こうとしたのです。古い道の盲目のうちに引き止めておけない者たちを、敵は新しい道の迷いによってわなにかけ、欺きます。3:3 敵は、教会そのものから人々をさらっていきます。彼らは、すでに光に近づき、世の夜を逃れたと自分では思っています。ところが敵は、知らないうちに、彼らに別の闇を再び注ぎ込むのです。こうして彼らは、キリストの福音にも、その教えを守ることにも、その律法にも立たないまま、自分をキリスト者と呼びます。闇の中を歩きながら、自分は光を持っていると思い込みます。敵対者がへつらい、欺くからです。使徒の言葉のとおり、敵対者は光の天使のように装い、自分の手下たちを、義の奉仕者のように装わせて送り込みます（第二コリント一一・一四～一五）。手下たちは、夜を昼と言い、滅びを救いと言い張ります。望みを装って絶望を、信仰を口実に不信仰を、キリストの名のもとに反キリストを持ち込みます。こうして、もっともらしい偽りを語って、巧妙さによって真理を無にするのです。3:4 愛する兄弟たちよ、こういうことが起こるのは、人々が真理の源に立ち返らないからです。かしらを求めず、天から授けられた教えを守らないからです。

4:1 このことをよく考え、調べてみる人には、長い論や議論は要りません。真理を手短に示せば、信じるための証明はたやすいのです。主はペテロに語って言われます。『わたしはあなたに言う。あなたはペテロである。そして、わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。黄泉の力もそれに打ち勝つことはない』（マタイ一六・一八）。4:2 『わたしは、あなたに天国のかぎを授けよう。そして、あなたが地上でつなぐことは、天でもつながれ、あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう』（マタイ一六・一九）。4:3 主は、一人の上に教会をお建てになります。たしかに主は、復活の後、使徒たち皆に等しい権能をお与えになり、こう言われます。『父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす。聖霊を受けよ。あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ、あなたがたがゆるさずにおく罪は、そのまま残るであろう』（ヨハネ二〇・二一～二三）。それでも主は、一致を明らかにするために、その一致の源が一人から始まるよう、ご自分の権威によってお定めになったのです。4:4 もちろん、ほかの使徒たちも、ペテロと同じものでした。栄誉においても権能においても、等しく分かち合っていたのです。しかし、始まりは一致から出ます。キリストの教会が一つであると示されるためです[1]。4:5 雅歌でも、聖霊が主になり代わって、この一つの教会を指し示して言われます。『わがはと、わが全き者はただひとり、彼女は母のひとり子、彼女を産んだ者に選ばれた者だ』（雅歌六・九）。4:6 この教会の一致を保たない者が、それでも信仰を保っていると思うのでしょうか。教会に逆らい、手向かう者が、自分は教会の中にいると信じているのでしょうか。祝福された使徒パウロも、同じことを教え、一致の秘儀を示して言っています。『からだは一つ、御霊も一つ、あなたがたが召された望みも一つ、主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ、神は一つである』（エペソ四・四～六）。

5:1 わたしたちは、この一致を堅く保ち、守らなければなりません。とりわけ、教会で上に立つわたしたち監督はそうです。監督の職そのものもまた、一つで分かたれないことを示すためです。だれも、偽りによって兄弟たちを欺いてはなりません。だれも、不信の背きによって、真理の信仰を損なってはなりません。5:2 監督の職は一つです。一人一人がその一部を担いますが、それは分けられない全体として担われているのです。教会は一つです。実り豊かに増えて、多くの人々へと広く行き渡っても、一つです。それは、太陽の光線は多くても、光は一つであるのと同じです。木の枝は多くても、しっかりした根に据えられた幹は一つです。一つの泉からは、多くの流れが流れ出ます。あふれ出る豊かさのために、その数は散らばって見えます。それでも、源では一つであることが保たれています。5:3 太陽の光線を本体から引き離してみなさい。光は一つなので、分かたれることを受け入れません。木から枝を折ってみなさい。折れた枝は、芽を出すことができません。泉から流れを断ち切ってみなさい。断ち切られた流れは、干上がります。主の教会も同じです。光を浴びて、全世界にその光線を伸ばしていま

す。それでも、どこにでも行き渡っている光は一つで、からだの一致は分かれていません。5:4 教会は、あふれる実りによって、全地に枝を広げます。豊かに流れ出る流れを、広く押し広げます。それでも、かしらは一つ、源も一つです。実りを重ねて豊かな母は、ただ一人です。わたしたちはこの母から生まれ、この母の乳で養われ、この母の霊によって生かされているのです。

6:1 キリストの花嫁は、姦淫に汚されることがありえません。花嫁は汚れがなく、貞潔です。一つの家だけを知り、一つの寝室の聖さを、純潔な恥じらいをもって守ります。この花嫁がわたしたちを神のために守り、自分が生んだ子らを御国にゆだねるのです。6:2 教会から離れて姦婦と結びつく者は、だれであれ、教会に与えられた約束から切り離されます。キリストの教会を捨てた者は、キリストの報いにたどり着くことはありません。その人はよそ者です。聖なるものの外にいる者です。敵です。6:3 教会を母として持たない者は、神を父として持つことはできません。ノアの箱舟の外にいた者のだれかが逃れることができたというのなら、教会の外にいる者も逃れられるでしょう。6:4 主はこう勧めて言われます。『わたしの味方でない者は、わたしに反対するものであり、わたしと共に集めない者は、散らすものである』（マタイ一二・三〇）。キリストの平和と和合を破る者は、キリストに反対することをしているのです。教会のほかのどこかで集める者は、キリストの教会を散らしているのです。6:5 主は、『わたしと父とは一つである』と言われます（ヨハネ一〇・三〇）。また、父と子と聖霊について、『この三つは一つである』[2]と書かれています（第一ヨハネ五・七）。この一致は、神の堅固さから来て、天の秘儀によって結び合わされています。それが教会の中で引き裂かれうると、いったいだれが信じるでしょうか。ぶつかり合う意志の仲たがいによって、分かたれうると信じるでしょうか。6:6 この一致を保たない者は、神の律法を保たず、父と子への信仰を保たず、いのちと救いを保たないのです。

訳注

1 この章には、ペテロの首位をはっきり言う別の形の本文も伝わる。

2 今の聖書の五章七節にはなく、八節の終わりの句に近い。

教会の一致について　7〜11章　裂かれない衣

7:1 この一致の秘儀、離れがたく結び合った和合のこの絆は、福音書に示されています。主イエス・キリストの下着は、少しも分けられず、裂かれもしませんでした。くじを引く者たちは、キリストの衣について、裂くよりも、だれがキリストを着るかをくじで決めました。こうして衣はそのまま受け取られ、下着は損なわれず、分けられないまま持ち主のものとなるのです。7:2 聖書はこう語り、また言います。その下着には縫い目がなく、上の方から全部一つに織ったものであったので、彼らは互に言いました。『それを裂かないで、だれのものになるか、くじを引こう』（ヨハネ一九・二三〜二四）。7:3 キリストは、上の方から来る一致を、すなわち天から、父から来る一致を帯びておられました。この一致は、それを受け取り、持つ者によっても、決して裂かれえないものでした。かえって、全体で一つの、欠けのない堅固さを、離れがたく保っていたのです。7:4 キリストの教会を裂き、分ける者は、キリストの衣を持つことはできません。反対に、ソロモンの死に際して、その国と民が裂かれようとしていたときのことです。預言者アヒヤは野でヤラベアム王に出会い、自分の着物を十二切れに裂いて言いました。『あなたは十切れを取りなさい』。主がこう言われるからです。『見よ、わたしは国をソロモンの手から裂き離して、あなたに十部族を与えよう。二つの部族は、わたしのしもべダビデのため、またわたしが選んだ町エルサレムのために、彼のものとなる。わたしの名をそこに置くためである』（列王紀上一一・三一〜三二、三六）。7:5 イスラエルの十二の部族が裂かれたので、預言者アヒヤは自分の着物を裂いたのです。しかし、キリストの民は裂かれることができません。ですから、全体が一つに織られ、つながっているキリストの下着は、それを持つ者たちによっても分けられませんでした。分けられず、結び合い、つながったその下着は、キリストを着たわたしたちの民の、結び合った和合を示しています。キリストは、衣という秘儀としるしによって、教会の一致を明らかになさったのです。

8:1 それでは、神の一致を、主の衣を、キリストの教会を、裂かれうると信じる者がいるでしょうか。あえて裂こうとする者がいるでしょうか。それほど邪悪で不信の者、それほど不和の狂気に駆られた者とは、いったいだれでしょうか。8:2 主ご自身が、ご自分の福音書の中で、こう勧め、教えて言われます。『そして、ついに一つの群れ、ひとりの羊飼となるであろう』（ヨハネ一〇・一六）。それなのに、一つの所に多くの羊飼や、いくつもの群れがありうると考える者がいるでしょうか。8:3 使徒パウロもまた、この同じ一致をわたしたちに説き聞かせて、懇願し、勧めて言います。『兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの名によって、あなたがたに勧める。みな語ることを一つにし、お互の間に分裂がないようにし、同じ心、同じ思いになって、堅く結び合っていてほしい』（第一コリント一・一〇）。8:4 また、こうも言います。『愛をもって互に忍びあい、平和のきずなで結ばれて、聖霊による一致を守り続けるように努めなさい』（エペソ四・二〜三）。教会から離れ去り、自分のために別の居場所を設け、違う住まいを建てる者がいます。その者が、それでも立ち続け、生き続けられると、あなたは思うのですか。8:5 ラハブには、こう言われているのです。ラハブのうちには、教会が前もって描かれていました。『あなたの父母、兄弟、およびあなたの父の家族をみな、あなたのもとに、あなたの家に集めなさい。ひとりでも家の戸口から外へ出る者があれば、その責めはその人自身に帰すでしょう』（ヨシュア二・一八〜一九）。また、出エジプト記の律法にある過越の秘儀も、ただ一つのことしか含んでいません。キリストのひな型として屠られる小羊が、一つの家で食べられることです。8:6 神はこう言われます。『ひとつの家でこれを食べなければならない。その肉を家の外に持ち出してはならない』（出エジプト一二・四六）。キリストの肉、主の聖なるものは、外へ持ち出されることができません。信じる者たちには、ただ一つの教会のほかに、どんな家もないのです。8:7 聖霊は詩篇の中で、この家を、心を一つにする者たちのこの宿を、指し示し、告げて

言われます。『神は、心を一つにする者たちを家に住まわせる』[1]（詩篇六八・六）。神の家に、キリストの教会に、心を一つにする者たちは住み、和合して、素直なままでとどまり続けます。

9:1 だからこそ、聖霊も鳩の姿で来られたのです。鳩は素直で、喜ばしい生き物です。胆汁の苦さもなく、かみつく残忍さもなく、爪で引き裂く荒々しさもありません。人の住まいを好み、一つの家に共に住むことを知っています。子をもうけるときは共にひなをかえし、飛び回るときは互いに離れません。共に暮らして生涯を送り、くちばしの口づけで平和の和合を確かめ合います。そして何事においても、心を一つにする掟を果たすのです。9:2 教会で知るべき素直さとは、これです。保つべき愛とは、これです。兄弟の愛が鳩にならい、柔和と穏やかさが小羊や羊に等しくなることです。キリスト者の胸に、狼の凶暴さ、犬の狂暴さ、蛇の死に至る毒、獣の血なまぐさい残忍さが、何の用があるでしょうか。9:3 そのような者たちが教会から離れていくときには、喜ぶべきです。彼らが、その残忍で毒のある汚れによって、キリストの鳩や羊を餌食にしないためです。苦さが甘さと、闇が光と、雨が晴れと、戦いが平和と、結び合い、一つになることはできません。実りと不毛も、泉と渇きも、凪と嵐も同じです。9:4 良い人々が教会から離れ去りうるなどと、だれも思ってはなりません。風は麦をさらわず、暴風はしっかりした根に据えられた木を倒しません。嵐に吹き飛ばされるのは、中身のないもみがらです。つむじ風に襲われて倒れるのは、弱い木です。9:5 使徒ヨハネは、こういう者たちを忌み嫌い、打ちすえて言います。『彼らはわたしたちから出て行った。しかし、彼らはわたしたちに属する者ではなかったのである。もし属する者であったなら、わたしたちと一緒にとどまっていたであろう』（第一ヨハネ二・一九）。

10:1 ここから、異端が、これまでもたびたび生じ、今も生じています。ゆがんだ思いが平和を持たず、不和をなす不信仰が一致を保たないからです。しかし主は、人が自分で選ぶ自由を残したまま、これが起こるのを許し、忍んでおられます。それは、試された者たちの完全な信仰が、はっきりした光のもとに輝き出るためです。真理による選り分けが、わたしたちの心と思いを調べるうちに、そうなるのです。10:2 聖霊は使徒を通して、前もって警告して言われます。『あなたがたの中で試された者が明らかにされるためには、異端もなければなるまい』（第一コリント一一・一九）。こうして、信仰ある者は試され、不信の者はあばかれます。こうして、裁きの日の前に、すでにこの世で、正しい者と正しくない者の魂が分けられ、もみがらが麦から選り分けられるのです。10:3 ここから、こういう者たちが出てきます。神の定めによらず、向こう見ずな寄せ集めの者たちのもとで、自分から進んで人々の長に収まる者たちです。任命の決まりによらず、自分を指導者に立てる者たちです。だれも監督の職を授けていないのに、監督の名を名乗る者たちです。聖霊は詩篇の中で、こういう者たちを、疫病のような者の座にすわる者として指し示しておられます（詩篇一・一）。彼らは信仰をむしばむ疫病であり、伝染病です。蛇の口で欺き、真理を損なう巧みな職人です。疫病をもたらす舌で、死に至る毒を吐き出す者たちです。その言葉はがんのように広がり、その説き明かしは一人一人の胸と心に、死をもたらす毒を注ぎ込みます。

11:1 このような者たちに向かって、主は叫ばれます。迷っているご自分の民を、彼らから引き止め、呼び戻して言われます。『偽預言者たちの言葉を聞いてはならない。彼らの心の幻は、彼らをむなしくする。彼らは語るが、主の口から語るのではない』（エレミヤ二三・一六）。11:2 『彼らは神の言葉を捨てる者たちに、あなたがたにも、自分の思いのままに歩むすべての者にも平安がある、と言う。心の迷いのうちに歩むすべての者に、あなたには災いが来ない、と言う』（エレミヤ二三・一七）。11:3 『わたしは彼らに語らなかったのに、彼らは預言した。もしわたしのもとに立ち、わたしの言葉を聞き、わたしの民を教えたなら、わたしは彼らを悪い思いから立ち返らせたであろうに』（エレミヤ二三・二一～二二）。11:4 主は、この同じ者たちを、もう一度指し示し、名指しして言われます。『彼らは、いのちの水の源であるわたしを捨てて、自分で水ためを掘った。それは、こわれた水ためで、水を入れておくことのできないものだ』（エレミヤ二・一三）。洗礼は一つのほかにありえないのに、彼らは自分たちが洗礼を授けていると思い込んでいます。いのちの源を捨てておきながら、いのちを与える救いの水の恵みを約束するのです。11:5 そこでは、人は洗い清められず、かえって汚されます。罪は清められず、むしろ積み重ねられます。その誕生は、神のため

にではなく、悪魔のために子らを生むのです。偽りによって生まれた者たちは、真理の約束を受けることができません。不信仰から生み出された者たちは、信仰の恵みを失います。11.6 主の平和を不和の狂気によって破った者たちは、平和の報いにたどり着くことはできません。

訳注

1 今の聖書では、寄るべなき者に家を与えると読む。

教会の一致について　12～16章　心を合わせる者と共に

12:1 ある人々は、むなしい解き明かしで自分を欺いてはなりません。主が次のように言われたことについてです。『ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、どこでも、わたしは彼らと共にいる』（マタイ一八・二〇）。福音を損なう者、偽りの解き明かしをする者たちは、後の句を挙げて、前の句を素通りします。一部を覚えていて、一部をずるく押し隠すのです。彼ら自身が教会から裂かれたように、一つのくだりの意味を裂くのです。12:2 主は弟子たちに、心を一つにすることと平和を勧めて、こう言われたのです。『あなたがたに言う。もしあなたがたのうちのふたりが、地上で心を合わせるとする。そのとき、あなたがたが求めるどんなことでも、天にいますわたしの父から、あなたがたにかなえられるであろう』（マタイ一八・一九）。12:3 『ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、どこでも、わたしは彼らと共にいるからである』（マタイ一八・二〇）。こうして主は、祈る者たちの数の多さにではなく、心が一つであることに、最も多くが与えられることをお示しになりました。『もしあなたがたのうちのふたりが、地上で心を合わせるなら』と言われます。主は、まず心を一つにすることを置き、平和の和合を先にお据えになりました。わたしたちが心を合わせることを、忠実に、またしっかりとお教えになったのです。12:4 しかし、教会の体そのものとも、兄弟たち全体とも心が合わない者が、どうしてだれかと心を合わせることができるでしょうか。キリストからも、その福音からも離れていることが明らかな者たちがいます。その者たちが、どうしてふたりか三人で、キリストの名によって集まることができるでしょうか。12:5 わたしたちが彼らから離れたのではありません。彼らがわたしたちから離れ去ったのです。異端と分裂は後から生まれました。彼らは、自分たちのために別々の集まりを設けるうちに、真理のかしらと源を捨てたのです。12:6 主はご自分の教会について語っておられます。教会の中にいる者たちに向かって語っておられるのです。その者たちが和合しているとします。そして、主がお命じになり、お勧めになったとおりに、たとえふたりか三人でも、心を一つにして集まって祈るとします。そのときには、ふたりか三人にすぎなくても、求めるものを神の威光から得ることができるのです。12:7 主は言われます。『ふたりまたは三人がいる所には、どこでも、わたしは彼らと共にいる』（マタイ一八・二〇）。素直で平和な者たちと共に、神を恐れ、神のいましめを守る者たちと共に、ということです。主は、たとえふたりか三人でも、その者たちと共にいると言われました。それは、炉の火の中の三人の若者と共におられたのと同じです。彼らは神に向かって素直で、互いに心を一つにし続けていました。それで主は、炎に囲まれた彼らを、そのただ中で、露の風によって生かしてくださいました。また、牢に閉じ込められた二人の使徒と共におられたのとも同じです。彼らは素直で、心を一つにしていたので、主ご自身がそこにおられました。主ご自身が牢の閂を解き放ち、彼らを再び公の広場にお置きになりました。彼らが忠実に宣べ伝えていた言葉を、群衆に伝えるためです。12:8 ですから、主はご自分のいましめの中に、『ふたりまたは三人がいる所には、わたしは彼らと共にいる』（マタイ一八・二〇）と置いて言われます。しかし、教会を設け、お造りになった方が、人々を教会から分けておられるのではありません。主は、不信の者たちに不和をとがめ、信仰ある者たちにはご自分の声で平和を勧めておられるのです。こうして、次のことをお示しになるのです。主は、言い争う大勢の者とよりも、心を一つにして祈るふたりか三人とこそ、共におられます。また、大勢の者が不和のうちにささげる祈りよりも、少数の者が和合してささげる願いのほうが、多くを得ることができるのです。

13:1 ですから主は、祈りの決まりをお与えになったときにも、こう付け加えて言われました。『また立って祈るとき、だれかに対して、何か恨み事があるならば、ゆるしてやりなさい。そうすれば、天にいますあなたがたの父も、あなたがたの罪をゆるしてくださるであろう』（マルコ一一・二五）。13:2 また主は、争い

を抱えたまま供え物をささげに来る者を祭壇から呼び戻されます。まず兄弟と和解し、それから平和のうちに帰ってきて、神に供え物をささげるようにお命じになるのです（マタイ五・二三〜二四）。神は、カインの供え物もお顧みにならなかったからです。ねたみによる不和のために、兄弟と平和を持たなかった者は、神と和らいでいることもできなかったのです。13:3 それなら、兄弟たちの敵である者たちは、どんな平和を自分に約束するのでしょうか。祭司たちに張り合う者たちは、どんな供え物をささげているつもりなのでしょうか。キリストの教会の外で集まる者たちが、自分たちが集まったときにはキリストが共におられる、と思い込んでいるのでしょうか。

14:1 このような者たちは、たとえ御名を告白して殺されたとしても、その汚れは血によってさえ洗い落とされません。不和の罪は、償うことのできない重いもので、苦しみを受けることによってさえ清められないのです。教会の中にいない者は、殉教者となることはできません。やがて王として治めることになる教会を見捨てた者は、御国にたどり着くことはできないでしょう。14:2 キリストはわたしたちに平和を与え、和合して心を一つにするようにお命じになりました。愛のきずなを損なわず、破らずに保つようにも、お命じになったのです。兄弟への愛を保たなかった者は、自分を殉教者として示すことはできません。14:3 使徒パウロは、このことを教え、証しして言います。『たとい、山を移すほどの信仰があっても、もし愛がなければ、わたしは無に等しい。わたしが持ち物をすべて食べ物として施しても、からだを焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、いっさいは無益である』（第一コリント一三・二〜三）。14:4 『愛は寛容であり、愛は情深い。愛はねたむことをしない。誇らない、いらだたない、高ぶらない、恨みをいだかない。すべてを愛し、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える』（第一コリント一三・四〜五、七）。14:5 『愛はいつまでも絶えることがない』（第一コリント一三・八）。『いつまでも』と使徒は言います。『愛は絶えることがない』。愛は、いつまでも御国にあるからです。愛は、互いに結び合う兄弟たちの一致のうちに、永遠に続くのです。不和は、天の御国にたどり着くことができません。キリストは言われました。『わたしのいましめは、これである。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい』（ヨハネ一五・一二）。不信の争いによってキリストの愛を破った者は、このキリストの報いにあずかることはできないでしょう。14:6 愛を持たない者は、神を持っていません。祝福された使徒ヨハネの声はこうです。『神は愛である。愛のうちにいる者は、神におり、神も彼にいます』（第一ヨハネ四・一六）。14:7 神の教会の中で心を一つにすることを拒んだ者たちは、神と共にいることはできません。たとえ炎と火に渡されて焼かれても、獣に投げ与えられて命を捨てても、それは信仰の冠ではなく、不信仰の罰です。敬虔な勇気の、栄えある最期ではなく、絶望の果ての滅びです。14:8 このような者は殺されることはあっても、冠を受けることはできません。彼は自分をキリスト者だと言い表します。それは、悪魔がしばしば自分をキリストだと偽るのと同じです。主ご自身が前もって警告して言われました。『多くの者がわたしの名を名のって現れ、自分がキリストだと言って、多くの人を惑わすであろう』（マルコ一三・六、マタイ二四・五）。14:9 あの者は、名を名のって欺いても、キリストではありません。それと同じように、キリストの福音と信仰の真理のうちにとどまらない者も、キリスト者とは見なされえないのです。

15:1 預言すること、悪霊を追い出すこと、地上で大いなる力あるわざを行うことは、たしかに崇高で、驚くべきことです。それでも、これらすべてのことのうちに見いだされる者が、それだけで天の御国を得るわけではありません。まっすぐで正しい道を守って歩むのでなければならないのです。15:2 主は告げて言われます。『その日には、多くの者が、わたしにむかって言うであろう。主よ、主よ、わたしたちはあなたの名によって預言したではありませんか。あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって大いなる力あるわざを行ったではありませんか、と』（マタイ七・二二）。15:3 『そのとき、わたしは彼らに言おう。あなたがたを全く知らない、不法を働く者どもよ、わたしから離れ去れ、と』（マタイ七・二三）。審判者である神に喜ばれるためには、義が必要です。わたしたちの行いが報いを受けるためには、神のいましめと勧めに従わなければなりません。15:4 主は福音書の中で、わたしたちの望みと信仰の道を、短い言葉で近道にして導こうとなさったとき、こう言われました。『主なるあなたの神は、ただひとりの主である』。また、『心をつくし、精神をつくし、力をつくして、主な

るあなたの神を愛せよ』（マルコ一二・二九〜三〇）。15:5『これが第一である。第二もこれと同様で、自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。これらの二つのいましめに、律法全体と預言者とが、かかっている』（マルコ一二・三一、マタイ二二・三八〜四〇）。主は、一致と愛とを同時に、ご自分の教えによってお教えになりました。預言者のすべてと律法とを、二つのいましめのうちにお収めになったのです。15:6それなのに、不和の狂気に駆られて教会を裂き、信仰を壊し、平和を乱し、愛を散らし、秘儀を汚す者がいます。その者が、どんな一致を保ち、どんな愛を守り、また心に思っているというのでしょうか。

16:1信仰の篤い兄弟たちよ、この悪は、もうずっと前から始まっていました。しかし今、この同じ悪の、害をなす災いが広がりました。異端のゆがみと分裂の、毒を含んだ破滅が、いっそう頭をもたげ、はびこり始めたのです。世界の終わりには、こうなるはずだったからです。聖霊が使徒を通して、わたしたちに前もって告げ、警告しておられたとおりです。『終りの時には、苦難の時代が来る。人々は、自分を喜ばせる者、高慢な者、大言壮語する者、金を愛する者、神をそしる者となる』（第二テモテ三・一〜二）。16:2『親の言うことを聞かない者、恩を知らぬ者、神聖を汚す者、無情な者、融和しない者となる。また、そしる者、無節制な者、粗暴な者、善を好まない者、裏切り者、乱暴者となる。愚かさにふくれあがった者、神よりも快楽を愛する者、信心深い様子をしながらその実を捨てる者となる』（第二テモテ三・二〜五）。16:3『彼らの中には、家々にもぐり込み、さまざまの欲に心を奪われて罪を積み重ねている愚かな女どもを、とりこにする者がある。彼女たちは、常に学んではいるが、いつになっても真理の知識に達することができない。ちょうど、ヤンネとヤンブレとがモーセに逆らったように、こうした人々も真理に逆らう。しかし、彼らはそのまま進んでいけるはずがない』（第二テモテ三・六〜九）。16:4『彼らの愚かさは、あのふたりの場合と同じように、すべての人に知れて来るからである』（第二テモテ三・九）。前もって告げられたことは、何でも成就しています。世の終わりがすでに近づくなか、それらは、人々をも時代をも等しく試すものとして、やって来ました。16:5敵対者がますます荒れ狂うので、迷いが欺き、愚かさが高ぶらせ、ねたみが燃え立たせ、貪欲が目をくらませます。不敬虔がゆがめ、高慢がふくれあがらせ、不和がいらだたせ、怒りが真っ逆さまに突き落とします。

教会の一致について　17～21章　分裂を起こす者と告白者

17:1 しかし、多くの者のはなはだしい、向こう見ずな不信仰に、わたしたちは動揺したり、心を乱されたりしてはなりません。むしろ、前もって告げられたことが本当になったのですから、それはわたしたちの信仰を強めるはずです。ある者たちがこのような者になり始めたのは、それが前もって告げられていたからです。同じように、ほかの兄弟たちは、このような者たちに気をつけるべきです。そのことも前もって告げられていたからです。主は教えて、こう言われました。『あなたがたは、気をつけていなさい。見よ、いっさいの事を、あなたがたに前もって言っておく』（マルコ一三・二三）。17:2 お願いします。このような人々を避けてください。滅びをもたらす彼らの話を、死をうつす病のように、あなたがたのそばからも耳からも遠ざけてください。こう書いてあるとおりです。『あなたの耳を茨で囲み、悪い舌に耳を貸すな』[1]（シラ書二八・二四）。17:3 また、こうも書いてあります。『悪い交わりは、良いならわしをそこなう』（第一コリント一五・三三）。主も、このような者たちから離れるべきことを教え、勧めて言われます。『彼らは、目の見えない人を手引きする、目の見えない人である。もし目の見えない人が目の見えない人を手引きするなら、ふたりとも穴に落ち込むであろう』（マタイ一五・一四）。17:4 だれであれ、教会から離れた者は、背を向けて避けるべきです。このような者は道を踏み外しており、罪を犯していて、自分で自分を罪に定めているのです。キリストの祭司たちに逆らって事を行う者がいます。キリストの聖職者たちとその民の交わりから、自分を切り離す者です。その者が、自分はキリストと共にいると思っているのでしょうか。17:5 その者は、教会に向かって武器を取り、神の秩序に逆らっています。祭壇の敵であり、キリストの供え物に背く者です。信仰の代わりに不信の者となり、敬虔の代わりに神聖を汚す者となっています。従わない僕、不敬虔な子、敵となった兄弟です。この者は、監督たちを軽んじ、神の祭司たちを捨てて、あえてほかの祭壇を築きます。許されない言葉で別の祈りをささげ、偽りの供え物によって主のいけにえの真実を汚すことまで、あえてするのです。神の定めに逆らおうとする者は、その無謀な大胆さのために、神の罰を受けます。それなのに、この者はそのことを知ろうともしません。

18:1 コラ、ダタン、アビラムもそうでした。彼らは、モーセと祭司アロンに逆らって、供え物をささげる資格を自分たちのものにしようとしました。そして、その企てのために、ただちに罰を受けたのです。地は継ぎ目が裂けて、深い淵へと口を開きました。退いていく地の裂け目が、立ったまま、生きたままの彼らをのみ込みました。お憤りになった神の怒りが打ったのは、首謀者たちだけではありませんでした。ほかに二百五十人の者がいました。彼らは同じ狂気にあずかり、首謀者たちと一つに固まって、大胆な企てに加わった仲間でした。主のもとから火が出て、すみやかな報いで、この者たちを焼き尽くしたのです。この火は、次のことを戒め、示すものでした。悪い者たちが、人の意志によって神の定めを壊そうと企てることは、何であれ神に逆らってなされることなのです。18:2 ウジヤ王も同じです。彼は香炉を手に持ち、神の律法に逆らって、供え物をささげることを力ずくで自分のものにしようとしました。祭司アザリヤが彼に立ちはだかったのに、従おうとせず、退こうともしませんでした。そのため、神の憤りに打たれ、額をまだらの重い皮膚病で汚されたのです。主を怒らせた彼は、主に喜ばれる者たちがしるしを付けられる、まさにその体の部分に、しるしを付けられました。18:3 また、アロンの子らは、主が命じておられなかったほかの火を祭壇に置きました。それで、罰をお下しになる主の前で、たちまち命を絶たれたのです。

19:1 神の伝えを軽んじて、ほかの教えを追い求め、人の定めた教えを持ち込む者たちがいます。彼らは、まさにこの者たちに倣い、その後に従っているのです。主は福音書の中で、このような者たちを責め、とがめて言われます。『あなたがたは、自分たちの伝えを立てるために、神のいましめを捨てている』（マル

コ七・九）。19:2 この罪は、背教者たちが犯したと見られている罪よりも重いのです。背教者たちは、それでも罪を悔い改める中にあって、十分な償いによって神に願い求めています。背教者は教会を求め、教会に願いますが、分裂を起こす者は教会に逆らいます。背教者には、やむをえない事情があったのかもしれません。しかし、分裂を起こす者の悪事は、自分の意志によるものです。背教した者は、自分だけを傷つけました。しかし、異端や分裂を起こそうとした者は、多くの人を引き込んで欺いたのです。背教者の場合は一人の魂の損失ですが、分裂を起こす者の場合は大勢の人の危険です。19:3 少なくとも背教者は、自分が罪を犯したことを知り、嘆き、悲しんでいます。ところが分裂を起こす者は、自分の罪にふくれあがり、自分の過ちそのものに満足しています。そして、子らを母から引き離し、羊を羊飼いからそそのかして連れ去り、神の秘儀をかき乱すのです。19:4 また、背教者は一度罪を犯しただけですが、分裂を起こす者は毎日罪を犯しています。そして最後に、背教者は、後に殉教を遂げれば、御国の約束を受けることができます。しかし分裂を起こす者は、教会の外で殺されても、教会の報いにたどり着くことはできません。

20:1 愛する兄弟たちよ、告白者たちの中からも、ある者たちがこのようなことにまで進んでいます。その中から、これほど忌まわしく重い罪を犯す者も出ています。そのことを、だれも驚いてはなりません。というのも、告白をしたからといって、悪魔のたくらみを受けなくなるわけではないからです。まだ世にいる者を、試みや危険や、世の襲撃や攻撃から、いつまでも安全に守るわけでもないのです。そうでなければ、告白者たちの中に、後になって欺きや淫らな行いや姦淫を見ることは、決してなかったでしょう。ところが今、ある人々の中にそれを見て、わたしたちはうめき、悲しんでいるのです。20:2 その告白者がだれであれ、ソロモンより偉大でも、すぐれてもおらず、神にいっそう愛されてもいません。そのソロモンも、主の道を歩んでいたあいだは、主から得た恵みを保っていました。しかし、主の道を捨てた後には、主の恵みも失ったのです。20:3 ですから、こう書いてあります。『自分の持っているものを堅く守っていなさい。ほかの人があなたの冠を取ることのないためである』（黙示録三・一一）。義が去れば、冠も去らずにはいません。そうでなければ、主は、義の冠が取り去られうると警告なさりはしなかったでしょう。

21:1 告白は栄光の始まりであって、まだ冠に値するものではありません。称賛を完成させるのではなく、誉れを始めさせるものです。『最後まで耐え忍ぶ者は救われる』（マタイ一〇・二二）と書いてあります。ですから、終わりの前にあるものはすべて、救いの頂へ上っていく段であって、頂上をすでに極めた到達点ではありません。21:2 その人は告白者です。しかし、告白の後には、危険はいっそう大きくなります。敵対者がいっそう挑発されたからです。その人は告白者です。それなら、なおさら主の福音と共に立っていなければなりません。福音によって主から栄光を得たのですから。21:3 『多く与えられた者からは多く求められ、多くの誉れを与えられた者からは、更に多くの奉仕が求められる』（ルカ一二・四八）。だれも、告白者を手本にして滅びてはなりません。告白者のふるまいから、不義も、横柄さも、不信仰も、だれも学んではなりません。21:4 その人は告白者です。それなら、へりくだって穏やかであるべきです。教えに従って、ふるまいを慎むべきです。キリストを告白する者と呼ばれる人が、自分が告白するキリストに倣うためです。キリストは言われます。『自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう』（ルカ一八・一四）。そして父は、キリストご自身を高くなさいました。父なる神の言葉であり、力であり、知恵である方が、地上でご自分を低くなさったからです。この方は、わたしたちにも、ご自分の掟によって低くなることをお命じになりました。ご自身も、低くなったことの報いとして、父から最もすぐれた名をお受けになりました。その方が、どうして自分を高くすることをお好みになるでしょうか。21:5 その人はキリストの告白者です。ただし、それは、後になって、その人によってキリストの威光と誉れが汚されないかぎりのことです。キリストを告白した舌が、悪口を言い、騒ぎ立ててはなりません。ののしりや争いでわめき立てる声が、聞こえてはなりません。賛美の言葉を語った後で、兄弟たちや神の祭司たちに向かって、蛇の毒を吐きかけてはなりません。21:6 もし、その人が後になって、とがめられるべき者、憎むべき者となったとします。悪い生き方によって自分の告白をむだにし、恥ずべき汚れで自分の生涯を汚したとします。ついには、自分が告白者と

なった教会を捨て、一致の和合を裂いて、初めの信仰を後の不信仰に替えたとします。そのような者は、栄光の報いに選ばれた者であるかのように、告白を頼みにうぬぼれることはできません。まさにそのことによって、罰に値するものがいっそう増し加わったのですから。

訳注

1 ギリシア語のシラ書では、持ち物を茨で囲めと読む。

教会の一致について　22〜27章　平和を保ち、目を覚まして

22:1 というのも、主はユダをも使徒たちのうちにお選びになりましたが、そのユダが後に主を裏切ったからです。しかし、裏切り者のユダが使徒たちの交わりから離れ落ちたからといって、使徒たちの堅さと信仰が崩れたわけではありません。22:2 ここでも同じです。ある人々の信仰が砕けたからといって、告白者たちの聖さと誉れが、すぐに損なわれたわけではありません。祝福された使徒は、その手紙の中でこう言っています。『すると、どうなるのか。もし、彼らのうちのある者が信仰から落ちたとしたら、その不信仰によって、神の真実は無になるであろうか』（ローマ三・三）。22:3 『断じてそうではない。神は真実であり、人はすべて偽り者だからである』（ローマ三・四）。告白者たちのうち、より多く、よりすぐれた人々は、しっかり立っています。自分の信仰の力強さのうちに、主の律法と教えの真理のうちに立っているのです。彼らは、神のお計らいによって、教会の中で恵みを得たことを覚えています。それで、教会の平和から離れないのです。そして、自分の信仰にいっそう大きな称賛を得ています。まさに、告白の交わりで結ばれていた者たちの不信仰から離れ、罪の汚れがうつらないように身を引いたことによってです。彼らは福音のまことの光に照らされ、主の清く白い光に輝いています。そして、悪魔との戦いで勝利者であったのと同じだけ、キリストの平和を守ることにおいても、ほめられるべき者なのです。

23:1 愛する兄弟たちよ、わたしは心から願い、また忠告し、勧めます。できることなら、兄弟たちのうちのだれ一人も滅びることがありませんように。母が、思いを同じくする民の一つのからだを、喜んでそのふところに抱きますように。23:2 しかし、分裂の首謀者や不和を起こす者たちの中には、盲目で頑なな狂気にとどまり続ける者たちがいます。救いのための忠告も、彼らを救いの道へ呼び戻すことができないかもしれません。それでも、ほかの人々よ、あなたがたの中には、素直さにつけこまれて捕らえられた人も、迷いに引き込まれた人もいます。人を欺く何らかの狡猾な抜け目なさに、だまされた人もいます。そのあなたがたは、欺きのわなから自分を解き放ちなさい。さまよう足取りを迷いから救い出し、天の道のまっすぐな道筋を見分けなさい。23:3 使徒は、はっきりと証しして、こう言います。『主イエス・キリストの名によってあなたがたに命じる。秩序を乱して歩み、わたしたちから受けた伝えに従わないすべての兄弟たちから、遠ざかりなさい』（第二テサロニケ三・六）。23:4 また、こうも言います。『あなたがたは、だれにもむなしい言葉でだまされてはいけない。そのために、神の怒りは不従順の子らに下るのである。だから、彼らの仲間になってはいけない』（エペソ五・六〜七）。罪を犯す者たちからは、遠ざからなければなりません。いや、むしろ逃げなければなりません。そうしないと、悪い歩みをする者たちと結びつき、迷いと罪の道を進むうちに、まことの道からそれてさまよいます。そして、自分も同じ罪に問われてしまうのです。23:5 神は一つ、キリストは一つ、キリストの教会も一つ、信仰も一つ、民も一つです。その民は、和合のにかわによって、からだの堅い一致へと結び合わされています。一致は裂かれえません。一つのからだは、継ぎ目を断ち切って分けられることも、はらわたを引き裂かれて、ずたずたにされることもありえないのです。23:6 母のもとから離れ去ったものは、何であれ、離れたまま生き、息をすることはできません。救いのよりどころを失うのです。

24:1 聖霊は、わたしたちに勧めて言われます。『いのちを慕い、さいわいな日々を見ることを好む人はだれか。あなたの舌をおさえて悪を言わせず、あなたのくちびるをおさえて偽りを言わすな』（詩篇三四・一二〜一三）。24:2 『悪を離れて善をおこない、平和を求めて、これを追え』（詩篇三四・一四）。平和の子は、平和を求め、平和を追わなければなりません。愛のきずなを知り、それを愛する者は、不和という悪から自分の舌をおさえなければなりません。24:3 主は、受難を間近にして、ご自分の神聖ないましめと救いに導く教えに、さらにこの言葉をお加えになりました。『わたしは平和をあなたがたに残して行く。わたしの平和を

あなたがたに与える』（ヨハネ一四・二七）。主は、これをわたしたちへの遺産としてお与えになりました。ご自分の約束の賜物と報いのすべてを、平和を守ることに結びつけて約束なさったのです。24:4 わたしたちがキリストの相続人であるなら、キリストの平和のうちにとどまりましょう。神の子であるなら、平和をつくり出す者でなければなりません。主は言われます。『平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう』（マタイ五・九）。神の子らは、平和をつくり出す者でなければなりません。心は柔和で、言葉は素直で、心の動きにおいて和合し、心を一つにするきずなで互いに忠実に結ばれていなければならないのです。

25:1 このように心を一つにすることが、かつて使徒たちのもとにありました。こうして、信じる者たちの新しい民は、主のいましめを守り、愛を保ったのです。聖書がそれを証ししています。『信じた者の群れは、魂を一つにし思いを一つにして、事を行っていた』（使徒四・三二）。25:2 また、こうもあります。『彼らはみな、婦人たち、またイエスの母であったマリヤ、およびイエスの兄弟たちと共に、心を一つにして、ひたすら祈をしていた』（使徒一・一四）。だから、彼らの祈りには力がありました。だから、神のあわれみに願い求めたものは何でも、確信をもって得ることができたのです。

26:1 ところが、わたしたちのうちでは、心を一つにすることが衰えました。それと同じだけ、施しのわざの気前よさも砕かれてしまいました。当時の人々は、家や地所を売りました。そして、その代金を、乏しい人々の必要のために分け与えてもらおうと、使徒たちのもとに持ってきたのです。こうして、天に自分の宝をたくわえていました。26:2 ところが今、わたしたちは自分の財産から十分の一さえささげません。主は、売るようにとお命じになります（ルカ一二・三三）。それなのに、わたしたちはむしろ買い、財産を増やしているのです。こうして、わたしたちのうちで信仰の勢いはしおれ、信じる者たちの強さは衰えてしまいました。26:3 だから主は、わたしたちの時代を見通して、福音書の中でこう言われます。『人の子が来るとき、地上に信仰が見られるであろうか』（ルカ一八・八）。主が前もって言われたことが起こっているのを、わたしたちは見ています。神を恐れることにおいても、義の律法においても、愛においても、わざにおいても、信仰はまったくありません。26:4 来たるべきことへの恐れを、だれも心に留めません。主の日も、神の怒りも、信じない者たちに来る罰も、不信の者たちに定められた永遠の責め苦も、だれも考えません。わたしたちの良心は、もし信じていれば恐れるはずのことを、信じていないので、まったく恐れもしないのです。もし信じていれば、用心もするはずです。用心すれば、逃れもするはずです。

27:1 愛する兄弟たちよ、できるかぎり自分を奮い立たせましょう。昔からの怠惰の眠りを破り、主の命令を守り行うために、目を覚ましていましょう。主ご自身がわたしたちにお命じになったとおりの者になりましょう。主は言われます。『腰に帯をしめ、あかりをともしていなさい。主人が婚宴から帰ってきて戸をたたくとき、あけてあげようと待っている人のようにしていなさい』（ルカ一二・三五～三六）。27:2 『主人が帰ってきたとき、目を覚しているのを見られる僕たちは、さいわいである』（ルカ一二・三七）。わたしたちは帯をしめていなければなりません。出立の日が来たときに、身動きがとれず、からまったままの姿で捕らえられないためです。わたしたちの光が、良いわざのうちに照り輝きますように。その光が、わたしたちをこの世の夜から、永遠の輝きの光へと導くためです。27:3 いつも気を配り、用心して、主が突然来られるのを待ちましょう。主が戸をおたたきになるとき、わたしたちの信仰が目を覚ましていて、目を覚ましていたことの報いを主から受けるためです。これらのいましめが守られ、これらの勧めと命令が保たれるとします。そうすれば、悪魔に欺かれて、眠っているところを襲われることはありえません。わたしたちは、目を覚ましている僕として、キリストが治めておられるもとで、王として治めるのです。

背教者について　1〜6章　平和の回復と倒れた兄弟たちへの嘆き

1:1 愛する兄弟たちよ、見なさい、教会に平和が返されました。つい先ごろまで、それは難しいことに思われ、信じない者や不信の者たちには、ありえないことに見えていました。けれども、神の助けと報復によって、わたしたちの安全は取り戻されたのです。思いは喜びに立ち帰りました。苦難の嵐と雲が吹き払われて、静けさと晴れ間が輝き出ました。1:2 神に賛美をささげ、神の施しと賜物を、感謝をもってたたえなければなりません。もっとも、迫害のさなかにも、わたしたちの声は感謝をささげることをやめませんでした。というのも、敵にそれほどのことは許されえないからです。わたしたちは、心をつくし、精神をつくし、力をつくして神を愛しています。そのわたしたちは、いつでもどこでも、栄光をもって神をほめたたえ、賛美を告げ知らせます。それをやめさせるほどのことは、敵に許されないのです。1:3 あらゆる願いをもって待ち望んだ日が来ました。長い夜の恐ろしく暗いやみの後で、世界は主の光に照らされて輝き出たのです。

2:1 わたしたちは、告白者たちを喜びの目で見つめます。彼らは良い名がたたえられて名高く、勇気と信仰をほめられて栄光に輝いています。わたしたちは聖なる口づけをもって彼らにすがりつきます。待ち望んでいた人々を、神から来る、尽きることのない切なる思いで抱きしめるのです。ここに、キリストの兵士たちの白く輝く一隊がいます。彼らは、迫りくる迫害の荒々しい猛威を、揺るがない戦いぶりで打ち砕きました。牢を忍ぶ備えができており、死に耐えるための武具を身に着けていたのです。2:2 あなたがたは世に雄々しく立ち向かいました。神に栄光ある見ものをお見せし、後に続く兄弟たちの模範となりました。敬虔な声は、ひとたび信じたと告白したキリストを、言い表しました。神のわざにしか慣れていなかった誉れある手は、神を汚す供え物に逆らいました。口は天の食物によって聖とされ、主のからだと血をいただいていました。その口は、汚れをうつすものも、偶像に供えた残り物も吐き捨てました。あの場所では、供え物をささげる者たちの頭が、不敬虔で罪深い覆いをかぶせられて、捕らわれていました。けれども、あなたがたの頭は自由なままでした。神の印を帯びた清い額は、悪魔の冠をかぶることができず、主の冠のために自分をとっておいたのです。2:3 母なる教会は、戦いから帰ってくるあなたがたを、なんと喜ばしい胸に迎えることでしょう！　なんと幸いに、なんと喜んで、門を開くことでしょう！　あなたがたが隊を組んで入り、打ち倒された敵から戦利品を携えてくるためです。2:4 勝利した男たちと共に、女たちも来ます。彼女たちは世に打ち勝つとともに、女という性にも打ち勝ったのです。戦いの栄光を二重にした処女たちも来ます。勇気において自分の年に勝る子供たちも来ます。2:5 さらに、立ち続けたほかの大勢の人々も、あなたがたの栄光に続いています。彼らは、あなたがたの誉れのしるしにごく近く、ほとんど並ぶほどのしるしを帯びて、あなたがたの足跡についていくのです。彼らのうちにも、同じ心の真実があり、固く保たれた信仰の、同じ全さがあります。2:6 彼らは、天のいましめの揺るがない根に支えられ、福音の伝えによって強められていました。だから、言い渡された追放も、用意された責め苦も、財産と体への罰も、彼らを恐れさせることはありませんでした。信仰を吟味する日々が、前もって定められていました。けれども、世を捨てたことを覚えている者は、世の日などは知りません。神から永遠を望む者は、もう地上の時を数えないのです。

3:1 兄弟たちよ、だれも、だれもこの栄光を欠けさせてはなりません。だれも、立ち続けた人々の損なわれない堅さを、悪意あるそしりで弱めてはなりません。否む者たちのために定められた期日は、もう過ぎました。期日のうちに出頭して申し出なかった者はだれでも、自分がキリスト者であると告白したのです。3:2 勝利の第一の誉れは、異邦人の手に捕らえられて、主を告白することです。栄光への第二の段階は、用心深く身を退いて隠れ、神のために自分をとっておくことです。前者は公の告白で、後者はひそかな告白です。前者は世の裁き人に打ち勝

ちます。後者は、自分の神が裁き人であることに満ち足りて、心の全さによって清い良心を守ります。前者には、より進んで立ち向かう強さがあり、後者には、より安全な用心があります。3:3 前者は、自分の時が近づいたときに、すでに熟した者と見いだされました。後者は、もしかすると先へ延ばされたのかもしれません。彼は財産を捨てて身を退きましたが、それは否むつもりがなかったからです。もし彼も捕らえられていたなら、きっと告白したはずです。

4:1 殉教者たちの天の冠、告白者たちの霊の栄光、立ち続けた兄弟たちの大きなすぐれた勇気。そのすべてを、ただ一つの悲しみが陰らせています。荒れ狂う敵が、荒らし回る殺戮によって、わたしたちの身を引きちぎり、その一部を打ち倒したからです。4:2 愛する兄弟たちよ、ここでわたしはどうしたらよいのでしょうか。思いが波のように揺れ動き、何を、どのように語ればよいのか、わかりません。この痛みを言い表すには、言葉よりも涙が必要です。この痛みをもって、わたしたちの体の傷を泣き悲しまなければなりません。この痛みをもって、かつては数多くいた民の、おびただしい損失を嘆かなければならないのです。4:3 いったい、だれがそれほど冷酷で、鉄のようでしょうか。だれがそれほど兄弟の愛を忘れているでしょうか。身内の者たちはさまざまに崩れ落ち、その残りは嘆かわしく、ひどく汚れて見る影もありません。その中に身を置きながら、目を乾かしたままでいられる者がいるでしょうか。すぐに涙があふれ出て、声よりも先に涙でうめきを表さずにいられる者がいるでしょうか。4:4 兄弟たちよ、わたしは心を痛めています。あなたがたと共に心を痛めています。わたし自身が無傷であることも、わたしひとりが健やかであることも、わたしの痛みをなだめはしません。羊飼いは、自分の群れの傷によって、いっそう深く傷つくからです。わたしは一人一人と胸を合わせ、悲嘆と弔いの痛ましい重荷を共に負います。4:5 わたしは嘆く者と共に嘆き、泣く者と共に泣き、倒れている者と共に、自分も倒れていると思います。荒れ狂う敵のあの投げ槍に、わたしの手足も共に打たれました。猛り立つ剣は、わたしの身をも貫きました。4:6 わたしの精神が、迫害の襲撃を受けずに、無傷で自由でいることはできませんでした。兄弟たちが打ち倒されたとき、彼らを思う心の動きが、わたしをも打ち倒したのです。

5:1 しかし、愛する兄弟たちよ、真実を見きわめなければなりません。敵意に満ちた迫害の暗いやみが、思いと感覚を、すっかり見えなくしてしまってはなりません。神のいましめを見分ける光と明かりが、少しも残らないほどにしてはならないのです。5:2 災いの原因がわかれば、傷の手当ても見つかります。主は、ご自分の家族を試そうとなさいました。長い平和が、神から伝えられた教えを損なっていました。そのため、天の懲らしめが、倒れていた信仰を、いや、眠っていたと言ってもよい信仰を、起こしたのです。わたしたちは、罪のために、もっと多くを受けて当然でした。けれども、このうえなくあわれみ深い主は、すべてを加減なさいました。こうして、起こったことのすべてが、迫害というより吟味と見えるようになさったのです。

6:1 人々は、めいめい財産を増やすことに熱心でした。信じる者たちが、かつて使徒たちのもとで何をしたか、またいつも何をすべきかを忘れていました。そして、飽くことのない欲の炎に燃えて、富を広げることに夢中になっていたのです。祭司たちには、ささげ尽くした敬虔がありませんでした。奉仕の務めには欠けのない信仰がなく、わざにはあわれみがなく、生き方には教えを守る姿がありませんでした。6:2 男たちはひげを損ない、女たちは顔を化粧で飾り立てていました。目は、神の手のわざの後から偽りの手を加えられ、髪は偽りの色に染められていました。素直な人々の心を欺くために、ずる賢いたくらみがありました。兄弟たちをだますために、腹黒いもくろみがありました。6:3 人々は、信仰のない者と結婚のきずなを結び、キリストの肢体を異邦人に差し出して汚していました。むやみに誓うだけでなく、偽って誓いさえしました。指導者たちを高ぶってさげすみ、毒のある口で互いにののしり合い、根深い憎しみで互いに仲たがいしていました。6:4 多くの監督は、ほかの人々の励ましとなり、模範とならなければなりません。それなのに、神の務めの管理をないがしろにして、世の王たちの財産の管理人になっていました。監督の座を捨て、民を見捨てて、よその属州をさまよい歩き、もうけになる商いの市をあさっていました。教会では兄弟たちが飢えているのに、自分は銀をたっぷり持とうとしていました。陰険な欺きで土地を奪い、利息を重ねて元手を増やしていたのです。6:5 このようなわたしたちが、このような罪のために、受けて当然でない苦しみなど、あったでしょうか。

神の懲らしめは、とうの昔に前もってこう警告していたのです。『もしわがおきてを捨て、わがさばきに従って歩まないならば、もしわが定めを犯し、わが戒めを守らないならば、わたしはつえをもって彼らのとがを罰し、むちをもって彼らの不義を罰する』（詩篇八九・三〇～三二）。

背教者について　7〜12章　自分から倒れた人々と財産の鎖

7:1 これらのことは、前もってわたしたちに告げられ、予告されていました。けれども、わたしたちは、与えられた律法も、それを守ることも忘れていました。そして、自分たちの罪によって、こうなるようにしてしまったのです。主のいましめを軽んじているうちに、罪を正し信仰を試すための、いっそう厳しい治療を受けることになりました。それでも、せめて遅ればせにでも、主を恐れることに立ち帰りはしませんでした。わたしたちを正し、神が試してくださるこのことを、忍耐強く雄々しく受けとめようとはしなかったのです。7:2 敵が脅しの言葉を口にするやいなや、兄弟たちの大多数が自分の信仰を裏切りました。迫害の勢いに打ち倒されたのではありません。自分から倒れて、自分で自分を打ち倒したのです。お尋ねしますが、どんな聞いたこともないことが起こったというのでしょうか。どんな新しいことが来たので、キリストへの誓いが、向こう見ずに慌てて解かれたのでしょうか。まるで、知られていない、思いもよらないことが持ち上がったかのようにです。7:3 これらのことは、前には預言者たちが、後には使徒たちが、告げ知らせていたではありませんか。聖霊に満たされた彼らは、正しい人々の苦しみと、異邦人たちから絶えず受ける不当な仕打ちを、予告していたではありませんか。聖書は、いつもわたしたちの信仰を武装させ、天の声によって神のしもべたちを強めています。その聖書が、『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』（申命記六・一三、マタイ四・一〇）と言っているではありませんか。7:4 また聖書は、神の憤りの怒りを示し、罰への恐れを前もって警告して、『彼らはその指で作ったものを拝んだ。こうして人はかがめられ、人々は低くされた。わたしは彼らをゆるさない』[1]（イザヤ二・八〜九）と、もう一度言っているではありませんか。7:5 さらに神は、重ねてこう言われます。『主のほか、他の神々に犠牲をささげる者は、断ち滅ぼされなければならない』（出エジプト二二・二〇）。主は、言葉では教える方、行いでは成し遂げる方です。なすべきことをお教えになり、お教えになったことはすべて、ご自分でなさったのです。後に福音書でも、いま起こっていること、これから起こることで、この主が前もって警告なさらなかったことがあるでしょうか。否む者には永遠の刑罰を、告白する者には救いの報いを、前もってお定めになったではありませんか（マタイ一〇・三二〜三三）。

8:1 なんということでしょう、ある人々からは、すべてが抜け落ち、記憶から去ってしまいました。彼らは、せめて捕らえられて上って行くまで、尋問されて否むまで、待つことさえしませんでした。多くの者が、戦列に就く前に負け、組み合うこともなく打ち倒されました。偶像に供え物をささげたのは心ならずもだった、と見えるだけの余地さえ、自分に残さなかったのです。8:2 彼らは、自分から公の広場へ駆けつけ、進んで死へ急いでいました。まるでずっと前からそれを望んでいたかのように、願ってもない機会が与えられて、それを抱きしめるかのようにです。あの場所で、夕方が迫ったために役人たちから日延べされた者が、どれほどいたことでしょう。自分の滅びが延ばされないようにと、頼みさえした者が、どれほどいたことでしょう！ 8:3 このような者は、どんな強制を言い立てて、自分の罪を晴らせるでしょうか。むしろ、自分が滅びるように、自分で自分に強制したのです。自分から進んでカピトリウムに来たとき、恐ろしい悪事に従うために自分から近づいたとき、足取りはよろめかなかったでしょうか。目はかすまず、身は震えず、手足は崩れ落ちなかったでしょうか。8:4 感覚はしびれず、舌はもつれず、言葉は途切れなかったでしょうか。すでに悪魔と世を捨てていた神のしもべが、あの場所に立って、語り、キリストを捨てることができたのでしょうか。死ぬことになる身で彼が近づいて行ったあの祭壇は、彼にとって火葬の薪の山ではなかったでしょうか。8:5 悪魔の祭壇が、ひどい悪臭を放って煙を上げ、においを立てているのを、彼は見ていました。それを自分のいのちの葬式と墓のように、身震いして避けなければならなかったのではないでしょうか。あわれな者よ、なぜあなたは、祈りをささげようとして、いけにえを携え、

犠牲を持ち込むのですか。8:6 あなた自身が、いけにえとして祭壇に来たのです。あなた自身が犠牲として来たのです。あなたはあの場所で、自分の救いを、望みをほふり、あの場所の葬りの火で、自分の信仰を焼き尽くしたのです。

9:1 しかも多くの者には、自分ひとりの滅びでは足りませんでした。互いに励まし合って、民が滅びへと押しやられたのです。人々は、死に至る杯で、互いに死を勧め合いました。そして、罪の山に欠けるものが何もないようにと、幼子たちまでもが、親の手に抱かれて、あるいは手を引かれて来ました。小さな者たちは、生まれてすぐ、いのちの初めに得ていたものを失ったのです。9:2 この子たちは、裁きの日が来たとき、こう言うのではないでしょうか。「わたしたちは何もしていません。主の食物と杯を捨てて、汚れをうつす俗なものへ、自分から急いだのではありません。ほかの人の不信仰が、わたしたちを滅ぼしたのです。わたしたちは、親が身内を殺す者だと思い知りました。親は、教会を否んで、わたしたちから母を奪い、神を否んで、わたしたちから父を奪ったのです。わたしたちは小さくて、何もわからず、これほどの悪事を知りませんでした。そのうちに、ほかの人によって罪の仲間に加えられ、ほかの人の欺きに捕らえられてしまったのです」

10:1 ああ悲しいことに、これほどの悪事を言い訳できる、正当で重い理由は何もありません。故郷を捨て、財産を失わなければならなかった、というのでしょう。けれども、生まれて死んでいく者で、いつかは故郷を捨て、自分の財産を失うことにならない者がいるでしょうか。10:2 キリストを捨ててはなりません。救いと永遠の住まいを失うことをこそ、恐れなければなりません。見なさい、聖霊が預言者によって叫んでおられます。『去れよ、去れよ、そこを出て、汚れた物にさわるな。その中を出よ、主の器をになう者よ、離れよ』（イザヤ五二・一一）。10:3 主の器であり、神の宮である者たちは、その中を出て身を退くはずではありませんか。汚れた物にさわることも、葬りの食物で汚され損なわれることも、強いられないためです。ほかの所でも、天から声が聞こえます。その声は、神のしもべたちが何をしなければならないかを前もって警告して、こう言います。『わたしの民よ。彼女から出て、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ』（黙示録一八・四）。10:4 出て身を退く者は、罪にあずかる者になりません。けれども、罪の仲間と見いだされる者は、自分も災害に巻き込まれます。だから主は、迫害の中では身を退いて逃げるようにとお命じになりました（マタイ一〇・二三）。そして、そうするようにお教えになり、またなさったのです。10:5 というのも、冠は、神のみこころによって下るもので、受ける時が来なければ受けることができないからです。ですから、キリストのうちにとどまりながら、しばらく身を退く者はだれでも、信仰を否むのではなく、時を待っているのです。けれども、身を退かずに倒れた者は、否むつもりで残っていたのです。

11:1 兄弟たちよ、真実を隠してはなりません。わたしたちの傷のもとと原因を、黙っていてもなりません。多くの者を、自分の財産へのやみくもな愛が欺きました。自分の富が足かせのように縛りつけた者たちは、身を退く備えも身軽さも持てなかったのです。11:2 それが、残った者たちの縛めでした。それが鎖でした。その鎖によって、勇気は鈍らされ、信仰は押しつぶされ、思いは縛られ、魂は閉じ込められました。こうして、地上のものにしがみつく者たちは、神の宣告どおり土を食らう蛇の、えじきと食物になったのです（創世記三・一四）。11:3 だからこそ、善いことを教える方であり、来るべきことを前もって警告なさる主は、こう言われます。『もしあなたが完全になりたいと思うなら、持ち物をみな売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう。そして、わたしに従ってきなさい』（マタイ一九・二一）。11:4 金持ちがこのとおりにしていれば、富のために滅びはしないはずです。天に宝を積んでいれば、いま家の中に敵を、内から攻め落とす者を、抱えることもないはずです。宝が天にあれば、心も精神も感覚も天にあるはずです。世で負かされるもとを持っていなければ、世に負かされることもありえないはずです。11:5 その人は、縛りを解かれて自由になり、主に従っているはずです。使徒たちがそうしました。使徒たちのもとで多くの者が、また少なからぬ人々が、しばしばそうしました。彼らは、自分の持ち物も親も捨てて、キリストとの分かたれないきずなに結びついたのです。

12:1 けれども、財産の縛めにつながれている者が、どうしてキリストに従うことができるでしょうか。地上の欲に重くされている者が、どうして天を目指し、

高くそびえる所へ上ることができるでしょうか。彼らは、自分が持っていると思っていますが、むしろ持たれているのです。自分の財の奴隷であって、金銭の主人ではなく、むしろ金銭に身を売り渡した者たちです。12:2 使徒は、この時代、このような人々を指して、こう言います。『富むことを願い求める者は、誘惑と、わなとに陥る。また、人を滅びと破壊とに沈ませる、恐ろしいさまざまの情欲に陥るのである』（第一テモテ六・九）。12:3 『金銭を愛することは、すべての悪の根である。ある人々は欲ばって金銭を求めたため、信仰から迷い出て、多くの苦痛をもって自分自身を刺しとおした』（第一テモテ六・一〇）。では主は、財産を軽んじるように、どんな報いをもってわたしたちを招いておられるでしょうか。12:4 いまの時の、この小さくわずかな損失を、どんな報酬で償ってくださるでしょうか。主は言われます。『だれでも神の国のために、家、畑、両親、兄弟、妻、子を捨てた者は、必ずこの時代ではその七倍を受ける。また、きたるべき世では永遠のいのちを受ける』[2]（マルコ一〇・二九～三〇、ルカ一八・二九～三〇）。12:5 わたしたちは、このことを知り、約束なさる神の真実によって確かめました。そうであれば、このように失うことは、恐れるべきでないばかりか、むしろ願うべきものです。主ご自身が、重ねてこう宣べ、勧めておられるからです。『あなたがたはさいわいだ。人の子のために、人々があなたがたを迫害し、排斥し、追い出し、悪い者としてあなたがたの名をののしるときは』（ルカ六・二二、マタイ五・一一）。12:6 『その日には喜びおどれ。見よ、天においてあなたがたの受ける報いは大きいのだから』（ルカ六・二三）。

訳注

1 今の聖書では、彼らをゆるさないでと預言者が願う言葉。

2 今の聖書では、百倍、あるいは幾倍もを受けると読む。

背教者について　13〜18章　拷問に負けた人々と偽りの平和

13:1 けれども、後には拷問が来ました。抗う者たちには、重い責め苦が迫っていました。拷問に負かされた者なら、拷問のことを嘆くこともできます。痛みの中で負けた者なら、痛みを言い立てて言い訳にすることもできます。13:2 そのような者は、ゆるしを願って、こう言うことができます。「わたしは、雄々しく戦おうとしました。自分の誓いを覚えて、献身と信仰の武具を取りました。けれども、組み打って戦っているわたしを、さまざまな責め苦と長い刑罰が負かしたのです。13:3 思いは揺るがずに立ち、信仰は強く、魂は、責めさいなむ刑罰と、動かずに長く戦いました。けれども、このうえなく冷酷な裁判官の残忍さが、またぶり返しました。もう疲れ果てたわたしを、代わる代わる、鞭がなおも引き裂き、棍棒が打ちすえました。拷問台が引き伸ばし、鉄の爪がえぐり、炎があぶったのです。そのとき、組み打ちのさなかに、肉がわたしを見捨てました。身の弱さが屈しました。痛みの中で力尽きたのは、精神ではなく、体だったのです」13:4 このような言い分なら、すぐにゆるしへと進むことができます。このような言い訳なら、あわれみを誘うことができます。こうしてこの地で、主はかつて、カストゥスとアエミリウスをおゆるしになりました。こうして、最初の組み打ちで打ち負かされた者たちを、二度目の戦いで勝利者になさったのです。前には火に屈した者たちが、火よりも強い者となり、負かされたそのもので勝つようになりました。13:5 彼らがゆるしを乞うたのは、涙のあわれさによってではなく、傷のあわれさによってでした。嘆きの声だけによってではなく、引き裂かれた体と痛みによってでした。泣くかわりに血が流れ、涙のかわりに、半ば焼かれた身から血しおがしたたり落ちていたのです。

14:1 けれども今、負けた者たちは、どんな傷を見せることができるでしょうか。口を開いた身のどんな打ち傷を、手足のどんな責め苦を見せられるでしょうか。ここでは、信仰が組み打って倒れたのではありません。不信仰が組み打ちに先回りしたのです。罪が意志から出たものであるところでは、罪を強いられたという言い分は、押し切られた者の言い訳になりません。14:2 わたしがこう言うのは、兄弟たちの立場を不利にするためではありません。むしろ兄弟たちを、償いの祈りへと駆り立てるためです。というのも、こう書いてあるからです。『あなたがたを幸いだと言う者は、あなたがたを迷わせ、あなたがたの行くべき道を混乱させる』[1]（イザヤ三・一二）。ですから、罪を犯す者を、へつらいの甘い言葉でなでる者は、罪を犯す火種を与えています。そういう者は、罪を抑えるのではなく、育てているのです。14:3 けれども、より強い勧めによってしかり、同時に教える者は、兄弟を救いへと進ませます。主は言われます。『わたしの愛している者を、わたしはしかったり、懲らしめたりする』（黙示録三・一九）。同じように、主の祭司もまた、人を欺くへつらいでごまかすのではなく、救いをもたらす手当てで人を顧みなければなりません。14:4 腫れあがった傷のくぼみを、手加減してなでるだけの医者は、未熟な医者です。そういう医者は、身の奥深くに閉じ込められた毒を、とどめておくことで、かえって増やしてしまいます。傷は開かなければならず、切らなければなりません。腐ったところを切り取って、より強い治療で手当てしなければなりません。14:5 病人は、痛みのためにこらえきれず、たとえわめき、叫び、不平を言っても、後で健やかさを感じたときには、感謝するでしょう。

15:1 というのも、愛する兄弟たちよ、新しい種類の災いが現れたからです。迫害の嵐の荒れ狂い方では足りなかったかのように、あわれみの名のもとに、欺く悪と甘い滅びが、災いの山に加わりました。ある人々の無謀さにより、用心のない者たちに交わりが軽々しく与えられています。福音の厳しさにも、主なる神の律法にも逆らってです。それは、むなしい偽りの平和です。与える者には危うく、受ける者には何の益にもならない平和です。15:2 彼らは、健やかになるまで耐え忍ぶことも、償いによるまことの治療も求めません。悔い改めは胸から締め出され、最も重い、極みの罪の記憶は取り去られてしまいました。死にかけてい

る者たちの傷は覆われ、身の深いところに刺さった死に至る打ち傷は、痛みを隠したまま覆い隠されています。15:3 彼らは、悪魔の祭壇から戻って来ると、いけにえの煙のにおいに汚れ染まった手のまま、主の聖なるものに近づきます。死をもたらす偶像の食物のげっぷを、まだ吐かんばかりです。その喉は、今もなお自分の悪事を吐き出し、葬りの汚れのにおいを漂わせています。その喉で、主のからだに襲いかかるのです。けれども聖書は、彼らの前に立ちはだかって、こう叫んでいます。『清い者はみな、肉を食べることができる。しかし、その身に汚れがあるのに、主にささげた救いの供え物の肉を食べる人は、だれであれ、民のうちから断たれるであろう』（レビ記七・一九～二〇）。使徒もまた、こう証言しています。『主の杯と悪霊どもの杯とを、同時に飲むことはできない。主の食卓と悪霊どもの食卓とに、同時にあずかることはできない』（第一コリント一〇・二一）。同じ使徒は、強情でかたくなな者たちを脅かして、こう告げています。『ふさわしくないままでパンを食し主の杯を飲む者は、主のからだと血とを犯すのである』（第一コリント一一・二七）。

16:1 これらすべてが軽んじられ、ないがしろにされています。罪はまだ清められず、罪の告白もまだなされていません。祭司の供え物と手によって、良心が清められてもいません。お憤りになり、脅かしておられる主の怒りも、まだなだめられていません。それなのに、主のからだと血に暴力が加えられているのです。今、彼らが手と口によって主に対して犯している罪は、主を否んだときよりも重いのです。16:2 ある人々が欺きの言葉で売り込むものを、彼らは平和だと思っています。けれども、それは平和ではなく、戦いです。福音から離れる者は、教会に結びつきません。なぜ、害を施しと呼ぶのでしょうか。16:3 なぜ、不敬虔を敬虔の名で呼ぶのでしょうか。絶えず泣き、自分の主に願い求めなければならない人々がいます。なぜ、その悔い改めの嘆きを断ち切って、その人々と交わっているふりをするのでしょうか。彼らは、このような倒れた者たちにとって、作物にとっての雹、木にとっての荒れた星です。家畜にとっての疫病の荒廃、船にとっての激しい嵐です。16:4 彼らは、望みの慰めを奪い、根から覆し、病んだ言葉で死に至る感染へと這い広がり、港に着かせないように船を岩に打ちつけます。この安易さは、平和を与えるのではなく、取り去るのです。交わりを授けるのではなく、救いに至る交わりを妨げるのです。16:5 これは、もう一つの迫害、もう一つの試みです。狡猾な敵は、これによって、まだ倒れている者たちを攻めるために、ひそかに荒らし回っています。嘆きが静まり、悲しみが黙り、罪の記憶が消え去るためです。胸のうめきが抑えられ、目の涙が止められるためです。ひどく怒らせてしまった主に、長く十分な悔い改めによってゆるしを乞わなくなるためです。けれども、『どこから倒れたかを思い起し、悔い改めなさい』（黙示録二・五）と書いてあるのです。

17:1 だれも自分を欺いてはなりません。だれも惑わしてはなりません。あわれむことがおできになるのは、主だけです。主に対して犯された罪にゆるしを与えることがおできになるのは、ただその方だけです。その方は、わたしたちの罪を負われ、わたしたちのために苦しまれました。神は、わたしたちの罪のために、この方をお渡しになったのです。17:2 人は、神より大きくなることはできません。主に対して重い罪によって犯されたことを、しもべが自分の寛大さでゆるし、免じることはできません。こう言うのは、まだ倒れている者の罪に、このことまでが加わらないためです。『人に望みを置く人は、のろわれる』（エレミヤ一七・五）と前もって言われているのを知らなければ、そうなってしまいます。17:3 祈り求めるべきは主です。わたしたちの償いによってなだめるべきは主です。主は、ご自分を否む者をご自分も否むと言われました（マタイ一〇・三三）。父から裁きのすべてを、ただひとりお受けになった方です。たしかにわたしたちは、殉教者たちの功績と義人たちのわざが、審き主のもとで大きな力を持つと信じています。しかしそれは、裁きの日が来たとき、この世と世界が終わった後、キリストの民がキリストの裁きの座の前に立つときのことです。

18:1 けれども、だれかが、早まった性急さで無謀にも、自分はすべての者に罪のゆるしを与えられると思うとします。あるいは、主の命令をあえて取り消すとします。その人は、倒れた者たちに益にならないばかりか、害にさえなるのです。18:2 主の宣告を守らなかったことは、怒りを招いたことです。まず主のあわれみを乞い求めるべきだと考えずに、主を軽んじて、自分の安易さを頼みにしたことも同じです。神の祭壇の下では、殺された殉教者たちの霊魂が、大声で叫んで言っています。『聖なる、まことなる主よ。いつまであなたは、さばくことを

なさらず、また地に住む者に対して、わたしたちの血の報復をなさらないのですか』（黙示録六・一〇）。18:3 すると彼らは、なおしばらく休んで、忍耐を保つように命じられます。それなのに、こう考える人がいるのでしょうか。だれかが罪を手当たりしだいにゆるして免じ、審き主に逆らってまで寛大な者になろうと望むことができる、と。自分の血の報復がまだなされないうちに、ほかの者たちをかばうことができる、と考えるのでしょうか。18:4 殉教者たちが、何かをするように命じるとします。それが正しく、許されたことで、主ご自身に逆らわずに神の祭司が行えることなら、従う者は、すみやかに快く同意すべきです。ただし、願う者に敬虔な節度があるならばです。18:5 殉教者たちが、何かをするように命じるとします。命じることが主の律法に書かれていないなら、まず、彼らが求めることを主から得たと、わたしたちが知らなければなりません。そのうえで、命じられたことを行うのです。18:6 というのも、人の約束で約束されたことが、すぐさま神の威光によって許されたと見なされるわけにはいかないからです。

訳注

1 今の聖書では、幸いだと言う者でなく、導く者と読む。

背教者について　19〜24章　とりなしの限りと、否んだ者たちへの罰

19:1 というのも、モーセも、民の罪のために願いはしたものの、罪を犯した者たちのゆるしを得られなかったからです。モーセは言います。『ああ主よ、この民は大いなる罪を犯しました。今もしあなたが、彼らの罪をゆるされますならば、ゆるしてください。しかし、もしかなわなければ、どうぞあなたが書きしるされたふみから、わたしを消し去ってください』（出エジプト三二・三一〜三二）。19:2 主はモーセに言われました。『すべてわたしに罪を犯した者は、これをわたしのふみから消し去るであろう』（出エジプト三二・三三）。モーセは神の友でした。しばしば主と顔を合わせて語った人でした。その人でさえ、願ったことを得られず、お憤りになった神の怒りを、自分のとりなしでなだめることはできなかったのです。19:3 神はエレミヤをほめたたえ、こう言われます。『わたしはあなたをまだ母の胎につくらないさきに、あなたを知った。あなたがまだ生れないさきに、あなたを聖別し、あなたを立てて万国の預言者とした』（エレミヤ一・五）。その同じエレミヤが、民の罪のためにたびたび願い、祈ったとき、神は言われました。『この民のために祈ってはならない。また願いと祈りをもって、彼らのために求めてはならない。彼らがわたしに呼ばわる時、その災の時に、わたしは聞かないからだ』（エレミヤ一一・一四）。19:4 ノアより正しい人がいたでしょうか。地が罪に満ちていたとき、地の上でただひとり正しい人と認められた人です。ダニエルより栄光ある人がいたでしょうか。殉教のわざに臨んで、信仰の堅さにおいて彼より強く、神に顧みられることにおいて彼より幸いな人がいたでしょうか。彼は、幾度も戦っては勝ち、勝っては生き延びたのです。19:5 ヨブより、行いにすすんで励み、試みに強い人がいたでしょうか。彼より痛みに忍耐深く、恐れにへりくだり、信仰にまことな人がいたでしょうか。けれども、この人々でさえ、たとえ願っても、神は聞き入れるとは言われませんでした。19:6 預言者エゼキエルが民の罪のためにとりなしたとき、神は言われました。『もし国がわたしに、もとりそむいて罪を犯すなら、わたしはその上に手を伸べる。そのつえとたのむパンを砕き、これにききんを送り、人と獣とをそのうちから断つ』（エゼキエル一四・一三）。19:7 『たといそこにノア、ダニエル、ヨブの三人がいても、そのむすこ娘を救うことはできない。ただ彼ら自身が救われるのみである』（エゼキエル一四・一四、一八）。このように、願われたことのすべてが、願う者の思いどおりに決まるのではありません。それは、与える方の心にかかっているのです。神の裁定がうなずかないかぎり、人の判断は何ひとつ自分のものとして取り込み、言い張ることはできません。

20:1 主は福音書の中で、こう言われます。『人の前でわたしを告白する者を、わたしもまた、天にいますわたしの父の前で告白するであろう。しかし、わたしを否む者を、わたしも否むであろう』（ルカ一二・八〜九、マタイ一〇・三二〜三三）。20:2 主が、否む者を否むことをなさらないのなら、告白する者を告白なさることもありません。福音が、一部では立ち、一部では揺らぐことはありえません。両方が効力を持つか、両方が真理の力を失うかの、どちらかでなければなりません。20:3 否む者が罪の責めを負わないのなら、告白する者も勇気の報いを受けないでしょう。さらに、勝った信仰が冠を受けるのなら、負けた不信仰が罰せられるのも、なくてはならないことです。ですから、福音が解かれうるなら、殉教者たちには何の力もありません。福音が解かれえないなら、福音によって殉教者となった人々が、福音に逆らうことはできません。20:4 愛する兄弟たちよ、だれも、だれも殉教者たちの尊さをおとしめてはなりません。だれも、彼らの栄光と冠をこわしてはなりません。損なわれない信仰の力は、無傷のまま残っています。望みも信仰も勇気も、栄光のすべてもキリストのうちにある人は、キリストに逆らって何かを言うことも、することもできません。神のいましめを自ら行った人々が、監督たちをそそのかして、神のいましめに逆らわせることはできないのです。20:5 それとも、神より大きく、神の優しさよりもあわれみ深い者がいるのでしょうか。その者が、神がお許しになって起こったことを、起こらなかった

ことにしようと望むのでしょうか。あるいは、自分の助けでわたしたちが守られうると考えるのでしょうか。まるで神には、ご自分の教会を守る力が足りなかったかのようにです。

21:1 それとも、これらのことは、神がご存じないうちに行われたのでしょうか。神がお許しにならないのに、すべて起こったのでしょうか。それなら、教えを受けつけない者を、聖書に教えさせましょう。忘れている者に、聖書に思い起こさせましょう。聖書はこう言っています。『ヤコブを奪わせ、かすめる者にイスラエルをわたした者はだれか』（イザヤ四二・二四）。21:2 『これは神ではないか。彼らは神にむかって罪を犯し、その道に歩むことを好まず、またその律法に聞き従うことを好まなかった。それゆえ、神は激しい怒りを彼らに臨ませられた』（イザヤ四二・二四〜二五）。また、ほかのところでは、こう証しして言います。『神の手は力がなくて、救うことができないのか。その耳は鈍くて、聞くことができないのか』（イザヤ五九・一）。21:3 『ただ、あなたがたの罪が、あなたがたと神との間を隔てている。あなたがたの罪のために、神はあなたがたから顔をそむけて、おあわれみにならないのだ』（イザヤ五九・二）。わたしたちは、自分の罪を顧みましょう。自分の行いと精神のひそかなところを思いめぐらして、良心に積まれたものを量りましょう。21:4 わたしたちは主の道に歩まず、神の律法を捨てました。そのいましめと救いの勧めを、決して守ろうとしませんでした。そのことを、心に思い返しましょう。

22:1 そのような者について、何か良いことを思えるでしょうか。その人にどんな恐れがあったと、どんな信仰があったと信じられるでしょうか。恐れもその人を正すことができず、迫害そのものもその人を造り変えなかったのです。高く、まっすぐなその首は、倒れたのに曲がりませんでした。ふくれ上がった高慢な精神は、負かされたのに砕かれませんでした。22:2 倒れている者が、立ち続けた人々を脅かします。傷を負った者が、無傷の人々を脅かすのです。汚れた手ですぐに主のからだを受けられず、汚れた口で主の血を飲めないからと、神を汚す者が祭司たちに怒っているのです。狂った者よ、あなたの狂気は、なんとひどいことでしょう！　あなたは、神の怒りをあなたからそらそうと努める人に怒っています。あなたのために主のあわれみを乞う人を脅かしています。その人は、あなた自身が感じていないあなたの傷を感じています。あなた自身はおそらく流していない涙を、あなたのために流しているのです。22:3 あなたは、罪をさらに重くし、積み上げています。あなた自身は、神の前に立つ者たちと祭司たちに対して、なだめようのない者でいます。それなのに、あなたのために主をなだめることができると思うのですか。

23:1 むしろ、わたしたちの言うことを受け止め、受け入れなさい。わたしたちの勧める救いのいましめを、なぜ聞こえない耳は聞かないのですか。わたしたちが差し出す悔い改めの道を、なぜ見えない目は見ないのですか。わたしたちが天の聖書から学び、また教えているいのちの薬を、閉ざされ、離れてしまった思いは、なぜ見ようとしないのですか。23:2 もし、ある信じない者たちが、来るべきことを信じきれないのなら、せめて今あることを見て恐れるがよいのです。見なさい。否んだ者たちが、なんという罰を受けているのを、わたしたちは目にしていることでしょう。彼らのなんと悲しい最期を、わたしたちは嘆いていることでしょう。まだその日は来ていませんが、彼らはこの世でも、罰を受けずにいることはできません。その間にも、ある人々が罰せられています。ほかの人々が正しい道に向けられるためです。少数の者の責め苦は、すべての人への見せしめなのです。

24:1 その一人は、否むつもりで自分から進んでカピトリウムに上りましたが、キリストを否んだ後、口がきけなくなりました。罰は、罪が始まったところから始まったのです。あわれみを乞う祈りの言葉を持たなくなった者は、もう願うこともできなくなりました。24:2 ある女は浴場にいました。いのちの洗いの恵みを失ったその女が、すぐに浴場にまで出かけたのです。その罪と悪に、まだ欠けていたのはこれだけでした。さて、そこで汚れた女は汚れた霊に捕らえられ、自分の舌を歯でかみ裂きました。不敬虔に食べもし、語りもした舌です。24:3 罪深い食べ物を口にした後、その口の狂いが、自分を滅ぼすために武器を取ったのです。女は自分で自分の処刑人となりました。その後、長く生き延びることはできず、腹と内臓の痛みに苦しめられて息絶えました。

背教者について　25〜30章　聖餐を汚した者たちと、悔い改めの勧め

25:1 わたし自身がその場にいて、証人となったことです。何が起こったかを聞いてください。ある両親が、たまたま逃げるとき、うろたえて十分に考えず、幼い娘を乳母に預けて養わせたまま、置いて行きました。置いて行かれたその子を、乳母は役人たちのもとへ連れて行きました。25:2 そこで役人たちは、民が群がり集まる偶像の前で、その子に、生のぶどう酒に浸したパンを与えました。その子はまだ幼くて、肉を食べることができなかったからです。そのパンもまた、滅びゆく者たちがささげたいけにえの残りでした。25:3 その後、母親は娘を取り戻しました。けれども、その子は自分の身に犯された悪事を、話して知らせることができませんでした。それは、前にそのことを悟ることも、拒むこともできなかったのと同じです。こうして、知らないために見過ごされてしまいました。わたしたちが供え物をささげているところに、母親がその子を連れて来たのです。25:4 ところが、その子は聖徒たちに交じっていながら、わたしたちの願いと祈りに耐えられませんでした。あるときは泣きじゃくって身を震わせ、あるときは思いが波立って揺れ動き、もだえたのです。まだ素朴な年ごろの幼い魂が、できるかぎりのしるしで、自分のされたことを知っていると打ち明けたのです。まるで拷問者に責め立てられて白状するかのようでした。25:5 やがて儀式が終わり、執事が居合わせた人々に杯を差し出し始めました。ほかの人々が受け、その子の番が来ました。すると、幼い娘は神の威光に促されて顔をそむけ、唇を固く閉じて口をふさぎ、杯を拒んだのです。25:6 それでも執事はやめず、その子が嫌がるのもかまわずに、杯の聖なるものを口に注ぎ込みました。すると、しゃくりあげて吐いてしまいました。汚された体と口の中に、聖餐はとどまることができなかったのです。主の血のうちに聖別された飲み物は、汚れた内臓から噴き出しました。25:7 主の力は、これほどに大きく、主の威光は、これほどに大きいのです。暗闇に隠されたことも、主の光のもとで明らかにされました。隠れた罪も、神の祭司を欺くことはなかったのです。

26:1 これは、他人が自分に犯した罪を話せる年に、まだなっていない幼子に起こったことです。ところが、ある女は、年も進んで大人の年ごろになっていましたが、供え物がささげられているところに、ひそかに紛れ込みました。女は、食べ物ではなく剣を、自分の身に受けたのです。死に至る毒を喉と胸に入れたように、女はその後、締めつけられ、魂がもだえて息が詰まり始めました。迫害ではなく、自分の罪の重圧を受けて、あえぎ、震えながら崩れ落ちたのです。26:2 偽り隠した良心の罪は、長く罰を免れることも、隠れたままでいることもありませんでした。人を欺いた女は、神が罰をお下しになる方であることを、身をもって知ったのです。また、ある女は、主の聖なるものを納めた自分の小箱を、汚れた手で開けようとしました。すると、そこから火が燃え上がり、女はおびえて、あえて触れることもできなくなりました。26:3 また、ある男も、同じように身を汚していました。それなのに、祭司が供え物をささげたとき、ほかの人々と共に、その分け前をあえてひそかに受けたのです。しかし、男は主の聖なるものを食べることも、手に取ることもできませんでした。開いた手を見ると、灰を持っていたのです。26:4 ただ一人の例によって、次のことが示されました。人が主を否むと、主は去って行かれます。ふさわしくない者には、受けたものも救いの益になりません。聖なるものが逃げ去って、救いの恵みが灰に変わるからです。毎日、どれほど多くの人が、汚れた霊に満たされていることでしょう。どれほど多くの人が、思いが狂うほどに正気を失い、狂気の激しさに揺さぶられていることでしょう！ 26:5 一人一人の最期をたどる必要はありません。世界じゅうのさまざまな倒れ方の中で、罪を犯す者の数が多いのと同じだけ、罪への罰もさまざまだからです。一人一人が、ほかの人が何を受けたかではなく、自分もまた何を受けるに値するかを考えるべきです。しばらくのあいだ罰が先に延ばされても、逃れたと思ってはなりません。審き主である神の怒りが、その人をとっておかれたのなら、その人はいっそう恐れなければならないからです。

27:1 証明書に良心を巻き込んだ者たちがいます。口にするのも忌まわしい供え物で手を汚さなかったとしても、悔い改めを行わなくてよいと、自分をあまやかしてはなりません。その申し出もまた、否む者の申し出です。それは、キリスト者でありながら、自分がそうであったことを拒む者の申し立てなのです。27:2 他人が実際に行って犯したことを、その人は、自分もしたと言ったのです。『あなたがたは、ふたりの主人に兼ね仕えることはできない』と書いてあります（マタイ六・二四）。それなのに、その人は世の主人に仕え、その勅令に従いました。神よりも、人の命令に聞き従ったのです。27:3 その人が、より小さな恥、より小さな罪で、人々の前に自分のしたことを公にしたかどうかは、もう問いません。それでも、審き主である神から逃れ、避けることはできないでしょう。聖霊が詩篇の中で、こう言っておられるからです。『あなたの目は、まだできあがらないわたしを見られた。すべての者が、あなたの書にしるされる』（詩篇一三九・一六）。また、『人は外の顔かたちを見、神は心を見る』とも言っておられます（サムエル記上一六・七）。主ご自身も、前もって警告し、備えさせて、こう言われます。『すべての教会は、わたしが人の心の奥底までも探り知る者であることを悟るであろう』（黙示録二・二三）。27:4 神は、隠されたことを見通し、ひそかなこと、秘められたことを見きわめておられます。だれも、神の目を逃れることはできません。神はこう言われるからです。『わたしは近づく神であって、遠くの神ではない。人がひそかな所に身を隠しても、わたしは彼を見ないであろうか』（エレミヤ二三・二三～二四）。27:5 神は、一人一人の心と胸を見ておられます。行いだけでなく、わたしたちの言葉と考えをも裁こうとしておられます。そのために、すべての人の思いと、抱いた願いとを、まだ閉ざされた胸の奥にあるうちから見通しておられるのです。

28:1 それに引きかえ、次のような人々は、どれほど信仰が大きく、恐れがすぐれていることでしょう。供え物の罪にも、証明書の罪にも縛られていない人々です。それでも、そのことを考えただけで、まさにそのことを神の祭司たちの前で、悲しみながら素直に言い表すのです。彼らは良心の罪の告白をし、精神の重荷をさらけ出し、小さな軽い傷にも救いの薬を求めます。こう書いてあることを知っているからです。『神は侮られるようなかたではない』（ガラテヤ六・七）。28:2 だれも、神を侮ることも、だますこともできません。どんな悪知恵で欺こうとしても、神を惑わすことはできないのです。むしろ、神を人間なみに考えて、公に罪を犯さなかったなら罪の罰を逃れられると思う者は、いっそう重い罪を犯しているのです。28:3 キリストは、ご自分のいましめの中で、こう言われます。『わたしを恥じる者を、人の子もまた恥じるであろう』（マルコ八・三八）。それなのに、キリスト者であることを恥じ、あるいははばかる者が、自分をキリスト者だと思っているのですか。キリストのものであることを恥じ、あるいは恐れる者が、どうしてキリストと共にいることができるでしょうか。28:4 確かに、その人の罪はより軽いでしょう。偶像を見ることもなく、まわりに立ってあざける民の目の前で、信仰の聖さを汚すこともしなかったからです。葬りの汚れに染まった供え物で自分の手を汚すことも、罪深い食べ物で口を汚すこともしなかったからです。28:5 けれども、それは罪が軽くなるのに役立つだけで、良心が潔白になるのに役立つのではありません。その人は、罪のゆるしにたやすく至ることができますが、それでも罪を免れているわけではありません。ですから、悔い改めを行うことも、主のあわれみを乞い求めることも、やめてはなりません。罪の性質としては小さく見えるものが、償いを怠ることで積み重ならないためです。

29:1 兄弟たちよ、お願いします。一人一人が、自分の罪を言い表してください。罪を犯した者が、まだこの世にいるうちに、そうしてください。その人の言い表すことが、まだ受け入れられるうちに、祭司たちを通しての償いとゆるしが、主に喜ばれるうちにです。29:2 思いをつくして主に立ち帰り、まことの痛みをもって罪の悔い改めを表しながら、神のあわれみを乞い求めましょう。神の前に魂がひれ伏し、神の前に悲しみが償いをし、神にすべての望みをかけましょう。29:3 どのように願うべきかを、神ご自身が言っておられます。神は言われます。『あなたがたは心をつくし、断食と涙と嘆きとをもってわたしに帰れ。あなたがたは衣服ではなく、心を裂け』（ヨエル二・一二～一三）。29:4 心をつくして主に帰りましょう。主ご自身が勧めておられるとおり、断食と涙と嘆きによって、主の怒りと憤りをなだめましょう。

30:1 では、次のような者が、心をつくし、断食と涙と嘆きによって主に願い求め、悲しみ嘆いていると、わたしたちは思うでしょうか。罪を犯したその日か

ら、毎日浴場に通う者です。あふれるほどのごちそうに養われ、たっぷり食べて腹をふくらませ、翌日には食べ過ぎのげっぷをする者です。自分の食べ物と飲み物を、貧しい人々の必要に分け与えない者です。30:2 明るく楽しげに出歩く者が、どうして自分の死を泣いていると言えるでしょうか。『ひげの両端をそこなってはならない』と書いてあります（レビ記一九・二七）。それなのに、その人はひげを抜き、顔を飾り立てています。神に喜ばれない者が、今なお、だれかに気に入られようと努めているのですか。30:3 あるいは、女はどうでしょう。高価な衣の装いを身にまとう暇はあっても、失ったキリストの衣のことは考えない女です。高価な飾りや、細工を凝らした首飾りを受け取っても、神の、天の飾りを失ったことを泣かない女です。そのような女が、うめき、嘆いているでしょうか。30:4 たとえあなたが、異国の衣や絹の着物をまとっても、あなたは裸です。たとえ金や真珠や宝石で身を飾っても、キリストの飾りがなければ、あなたは醜いのです。髪を染めている女よ、せめて今、悲しみのときには、それをやめなさい。黒い粉で目の線を描いている女よ、せめて今は、涙で目を洗いなさい。30:5 もしあなたが、身内の愛する者をだれか死によって失ったとしたら、悲しんでうめき、泣いたでしょう。顔の手入れもせず、喪の着物に替え、髪も構わず、顔を曇らせ、うつむいて、悲しみのしるしを見せたでしょう。30:6 あわれな女よ、あなたは自分の魂を失ったのです。霊において死んだまま、ここで自分のために生き延び、歩きながら、自分の亡骸を自分で運び始めたのです。それなのに、激しく嘆かないのですか。絶えずうめかないのですか。罪を恥じて、あるいは悲しみ嘆き続けて、身を隠さないのですか。30:7 罪を犯しながら償わず、過ちを犯しながらその過ちを泣かないこと。見なさい、それこそ、罪のさらに悪い傷です。見なさい、それこそ、さらに大きな過ちなのです。

訳注

1 今の聖書では、前半を、近くの神にすぎないのかと問う形で読む。

背教者について　31～36章　悔い改めの道と、ゆるしの望み

31:1 ハナニヤ、アザリヤ、ミシャエルという、名高く気高い若者たちがいました。彼らは、燃えさかる炉の炎と火のただ中にあっても、神に罪の告白をすることをやめませんでした。彼らは良心にやましいところがなく、信仰と恐れをもって仕えて、たびたび主に喜ばれていました。それでも、へりくだりを保ち、神に償いをすることをやめなかったのです。自分たちの勇気を示す、栄光ある証しのただ中でさえ、そうでした。31:2 聖書は、こう語っています。『アザリヤは立って祈り、口を開いて、火の中で仲間と共に、神に罪の告白をした』[1]（ダニエル三・二五）。ダニエルもそうです。彼は、信仰と潔白のゆえに、さまざまな恵みを受けていました。その勇気と誉れに、主がたびたび目を留めてくださってもいました。それでもなお、断食によって神に喜ばれようと努め、荒布と灰の中に身を転がしたのです。そして、悲しみながら罪の告白をして、こう言いました。『ああ主なる神、大いなる、力ある、恐るべき神よ。あなたは、あなたを愛し、あなたの戒めを守る者のために、契約とあわれみとを保たれます。われわれは罪を犯し、悪をおこない、よこしまなふるまいをなし、そむいて、あなたの戒めと、おきてを離れました。あなたのしもべなる預言者たちは、あなたの名をもって、われわれの王たちと、すべての国民と、全地とに告げました。われわれは、それに聞き従いませんでした。主よ、正義はあなたのもの、あなたのものです。しかし、恥はわれわれのものです』（ダニエル九・四～七）。

32:1 柔和で、素直で、潔白な人々が、威光ある神に喜ばれるために、このようにしたのです。それなのに今、主を否んだ者たちが、主に償いをし、願い求めることを拒んでいます！　兄弟たちよ、お願いします。救いをもたらす治療に身をゆだねてください。よりよい勧めに従ってください。わたしたちの涙に、あなたがたの涙を合わせてください。わたしたちのうめきに、あなたがたのうめきを重ねてください。32:2 わたしたちは、あなたがたのために主に願うことができるよう、あなたがたに願います。神があなたがたをあわれんでくださるようにと、わたしたちは神に祈ります。その祈りそのものを、まずあなたがたに向けるのです。十分な悔い改めを行ってください。痛み、悲しみ嘆く精神の悲しみを、示してください！

33:1 ある人々の、先を見ない迷いや、むなしい鈍さに、心を動かされてはなりません。彼らはこれほど重い罪にとらわれていながら、精神の盲目に打たれています。そのため、自分の過ちを悟ることも、嘆くこともないのです。33:2 これこそ、お憤りになった神の、さらに大きな打撃です。こう書いてあるとおりです。『神は彼らに鈍い霊を与えた』（イザヤ二九・一〇、ローマ一一・八）。また、こうも書いてあります。『彼らは、救われるための真理に対する愛を受けいれなかった。そこで神は、彼らが偽りを信じるように、迷わす力を送る。それは、真理を信じないで、不義のうちに自分に満足していたすべての人が、さばかれるためである』（第二テサロニケ二・一〇～一二）。33:3 彼らは、不義にも自分に満足し、鈍くされた思いの錯乱によって、正気を失っています。主の命令を侮り、傷の手当てを怠り、悔い改めを行おうとしません。悪事を犯す前には先を見ず、悪事の後にはかたくなです。前には揺るがずに立つこともなく、後には願い求めることもありません。立っていなければならなかったときに、倒れました。倒れて神の前にひれ伏さなければならない今、自分は立っていると思っているのです。33:4 彼らは、だれも与えないのに、自分から平和を取ったのです。偽りの約束に惑わされ、教会を離れた者たち、不信の者たちと結びついて、真理の代わりに迷いを受け入れています。交わりの外にいる者たちの与える交わりを、有効なものとみなしているのです。人に逆らって神を信じなかった者たちが、今は神に逆らって人を信じています。

34:1 このような人々からは、できるかぎり逃れてください。破滅をもたらす触れ合いにしがみつく者たちを、身のためになる用心をもって避けてください。彼らの言葉は、がんのようにひろがります。彼らとの語らいは、病がうつるように

飛び移ります。害をもたらし、毒を含んだ説得は、迫害そのものよりもひどく人を殺すのです。34:2迫害で倒れたのなら、償いとなる悔い改めがまだ残されています。けれども、罪の悔い改めを取り去る者たちは、償いの道を閉ざしてしまうのです。こうして、ある人々の向こう見ずのために、偽りの救いが約束され、また信じられます。そのあいだに、まことの救いの望みが奪われてしまうのです。

35:1しかし、兄弟たちよ、あなたがたは違います。あなたがたには主を恐れる心がすぐに起こり、倒れた身であっても、精神が自分の悪を覚えています。悔い改め、痛みながら、自分の罪を見つめてください。良心のきわめて重い罪を認めてください。自分の過ちを悟るために、心の目を開いてください。主のあわれみに望みを失ってはなりません。しかし、ゆるしを今すぐ自分のものだと言い張ってもなりません。35:2神は、父としての慈愛によって、常にいつくしみ深く、善い方です。それと同じだけ、審き主としての威光によって、恐るべき方でもあります。わたしたちが大きな過ちを犯したのと同じだけ、大いに泣きましょう。深い傷には、念入りで長い治療が欠けてはなりません。悔い改めが、罪より小さくてはならないのです。35:3あなたは、不信の言葉で神を拒みました。神より財産を重んじるほうを選び、冒瀆の汚れに触れて神の宮を汚しました。その神を、すぐになだめることができると思うのですか。自分の神ではないとあなたが言った、その方が、たやすくあなたをあわれんでくださると思うのですか。35:4もっと熱心に祈り、願わなければなりません。昼は喪に服して過ごし、夜は徹夜と涙のうちに送らなければなりません。すべての時を、涙にくれる悲しみ嘆きで満たさなければなりません。地に伏して灰にすがり、荒布と汚れの中に身を転がさなければなりません。キリストの衣を失った後は、もはやどんな着物も望まず、悪魔の食べ物の後は、断食を選ばなければなりません。罪を清める正しいわざに励み、魂を死から救い出す施しを、たびたび行わなければなりません。35:5敵対者が奪おうとしていたものを、キリストに受けていただきましょう。人がそれによって欺かれ、打ち負かされた財産を、もはや持ち続けてはならず、愛してもなりません。その財産は、敵として避け、盗人として逃れ、持つ者にとっては剣や毒として恐れるべきものです。35:6残ったものは、ただ一つのことに役立てばよいのです。それによって、罪と咎があがなわれることです。ためらわず、惜しみなく、施しのわざを行いましょう。傷の手当てのために、財をすべて使いましょう。わたしたちを裁こうとしておられる主に、わたしたちの資産と富を貸しましょう。35:7使徒たちのもとで、信仰はこのように力を持っていました。最初の信じる民は、このようにキリストのいましめを守りました。彼らは進んで、惜しみなく与えたのです。使徒たちを通して分け与えてもらうために、すべてを差し出しました。しかも、これほどの過ちをあがなっていたのではなかったのです。

36:1心をつくして祈り、悔い改めのまことの悲しみ嘆きと涙をもってうめく人がいるとします。正しい、絶え間ないわざによって、自分の過ちのゆるしへと主のみこころを傾ける人がいるとします。主は、このような人々をあわれむことがおできになります。主はご自分のあわれみをお示しになって、こう言われたからです。『あなたが立ち返ってうめくなら、そのときあなたは救われ、自分がどこにいたかを知る』[2]（イザヤ三〇・一五）。また、こうも言われます。『わたしは死ぬ者の死を喜ばない、と主は言われる。むしろ、その者が立ち返って生きるのを喜ぶ』（エゼキエル三三・一一）。36:2預言者ヨエルも、主ご自身に促されて、主の慈愛を告げています。ヨエルは言います。『あなたがたの神、主に帰れ。主はあわれみがあり、慈愛に満ち、怒ることがおそく、あわれみが豊かで、下した災いについて宣告を翻されるからである』（ヨエル二・一三）。36:3主は、いつくしみを与えることがおできになります。ご自分の宣告を翻すことがおできになります。悔い改め、施しのわざを行い、願い求める者を、あわれみ深くゆるすことがおできになります。このような者のために、殉教者たちが願ったこと、祭司たちが行ったことを、勘定に入れることもおできになるのです。36:4あるいは、ある人が自分の償いによって、主をさらに深く動かしたとします。正しい願いによって、主の怒りを、主の憤りを、なだめたとします。そのとき主は、打ち負かされた者が身を固めるための武器を、もう一度お与えになります。立て直された信仰が力を得るように、力を回復させ、強めてくださいます。36:5兵士は、自分の戦いをもう一度始めます。再び戦列に加わり、敵に挑みます。しかも、痛みによって、戦いに前より強くなっているのです。このようにして神に償いをする人がいます。自分のしたことを悔い改め、過ちを恥じ、まさに自分が倒れたことの痛みから、さらに大きな勇気と信仰を宿す人です。その人は、主に聞き入れら

れ、助けられます。そして、少し前に悲しませた教会を、喜ばせるでしょう。もはや、神のゆるしだけでなく、冠を受けるにもふさわしい者となるのです。

訳注

1 ダニエル書のギリシア語訳にだけある部分の言葉。

2 今の聖書では、うめくのでなく、落ち着いているならば救われると読む。

主の祈りについて　1〜7章　祈りの心構え

1:1 愛する兄弟たちよ、福音のおきては、神の教えにほかなりません。それは、望みを築き上げる土台、信仰を強める支え、心を温める糧、旅路を導く舵、救いを得させる守りです。これらのおきては、地上で、信じる者たちの教えを受けやすい思いを教えながら、天の御国へと導いていきます。1:2 神は、ご自分のしもべである預言者たちを通しても、多くのことを語らせ、聞かせようとなさいました。しかし、御子がお語りになることは、どれほどまさっていることでしょうか。それは、かつて預言者たちの中にいた神の言葉が、今はご自分の声で証しなさることです。この方は、もはや、来られる方のために道を備えよとお命じになるのではありません。ご自身が来られて、わたしたちに道を開き、示してくださるのです。わたしたちは、以前は死の暗やみの中をさまよい、先を見ず、目も見えない者でした。そのわたしたちが、恵みの光に照らされ、主を導き手とし、舵取りとして、いのちの道を保つためです。

2:1 この主は、ご自分の民の救いを図って、救いに役立つ勧めと神のおきてを数多くお与えになりました。その中で、祈りの形もご自身でお与えになったのです。何を願うべきかを、ご自身で勧め、教えてくださいました。2:2 わたしたちを生かしてくださった方が、祈ることもお教えになりました。ほかのものを与え、授けてくださったのと同じ恵み深さによって、そうしてくださったのです。それは、わたしたちが、御子がお教えになった願いと祈りで父に語りかけるとき、いっそうたやすく聞き入れていただくためです。2:3 主は、まことの礼拝をする者たちが霊とまことをもって父を礼拝する時が来る、とすでに予告しておられました（ヨハネ四・二三）。そして、前に約束なさったことをお果たしになりました。わたしたちは、主が聖としてくださったことによって、霊とまことを受けました。そのわたしたちが、主の伝えによっても、まことに、霊的に礼拝するためです。2:4 というのも、キリストがわたしたちにお与えになった祈りよりも霊的な祈りが、どこにあるでしょうか。キリストは、わたしたちに聖霊をも遣わしてくださった方です。まことそのものである御子が、ご自分の口から語り出された祈りよりも、父のみもとでまことの願いがあるでしょうか。2:5 ですから、主がお教えになったのと違うふうに祈るのは、知らないというだけでなく、とがにもなります。主ご自身が、こう言い渡しておられるからです。『あなたがたは、自分たちの伝えを立てるために、神のいましめを捨てている』（マルコ七・九）。

3:1 ですから、愛する兄弟たちよ、師である神がお教えになったとおりに祈りましょう。神ご自身のものによって神に願い、キリストの祈りを神の耳にまで上らせること。それが、親しく打ち解けた祈りです。わたしたちが願いをささげるとき、父が、御子の言葉だとお認めになりますように。胸のうちに住んでおられる方が、声の中にもおられますように。わたしたちには、父のみもとに、わたしたちの罪のための助け主として、この方がおられます。ですから、罪人であるわたしたちが過ちのために願うときには、わたしたちの助け主の言葉を差し出しましょう。3:2 というのも、主は、わたしたちがキリストの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えてくださると言われます（ヨハネ一六・二三）。それなら、キリストの名による願いを、キリストご自身の祈りで願うなら、どれほど確かに聞き入れていただけることでしょうか。

4:1 祈る人の言葉と願いは、節度をもち、静けさと恥じらいを保つものでありますように。わたしたちは、神の目の前に立っていることを思いましょう。体の姿勢でも、声の調子でも、神の目に喜ばれなければなりません。4:2 というのも、大声でわめき立てるのは、恥知らずな者のすることです。それと反対に、慎み深い者には、控えめな願いで祈ることがふさわしいのです。それで主も、ご自分の教えの中で、隠れて祈るようにとお命じになりました。人目につかない、離れた所で、へやの中で祈れというのです（マタイ六・六）。そのほうが、信仰にかなうからです。それは、神がどこにでもおられ、すべての人の言うことを聞き、す

べての人を見ておられることを、わたしたちが知るためです。神は、満ちあふれる威光によって、隠れた所にも、ひそかな所にもお入りになります。こう書いてあるとおりです。『わたしは近づく神であって、遠くの神ではない』[1]（エレミヤ二三・二三）。4:3『人がひそかな所に身を隠しても、わたしは彼を見ないであろうか。わたしは天と地とに満ちているではないか』（エレミヤ二三・二四）。また、『神の目はどこにでもあって、善人と悪人とを見張っている』とも書いてあります（箴言一五・三）。4:4また、兄弟たちと一つ所に集まり、神の祭司と共に神の供え物をささげるときには、慎みと節度を忘れてはなりません。わたしたちの願いを、ところかまわず、乱れた声でまき散らしてはなりません。控えめに神にゆだねるべき願いを、騒がしい多弁で投げつけてもなりません。神は、声ではなく心を聞かれる方だからです。考えを見ておられる方に、叫び声で知らせる必要はありません。主ご自身も、それを裏づけて、こう言われます。『なぜ、あなたがたは心の中で悪いことを考えているのか』（マタイ九・四）。4:5また、ほかの所でも、『すべての教会は、わたしが人の心の奥底までも探り知る者であることを悟るであろう』と言われます（黙示録二・二三）。

5:1ハンナは、サムエル記上の中で、教会のひな型を担って、このことを守り、保っています。ハンナは、騒がしい願いで神に祈ったのではありません。黙って、控えめに、胸の奥の隠れた所で祈ったのです。5:2ハンナは、ひそかな願いで、しかし明らかな信仰をもって語りました。声ではなく、心で語りました。主がそのように聞いてくださる方だと知っていたからです。そして、願ったことを確かにかなえていただきました。信じて願い求めたからです。聖書は、こう言って、そのことを明らかにしています。『ハンナは心のうちで物を言っていた。くちびるは動いていたが、声は聞えなかった。そして、主は彼女の願いをお聞き入れになった』（サムエル記上一・一三）。5:3また、詩篇の中でも、こう読みます。『あなたがたは心のうちで語り、床の上で心を刺されなさい』（詩篇四・四）。聖霊は、エレミヤを通しても、同じことを示し、教えて、こう言っておられます。『主よ、心のうちでこそ、あなたを拝まなければなりません』[2]（エレミヤの手紙五）。

6:1愛する兄弟たちよ、祈る人は、取税人がパリサイ人と共に宮で、どのように祈ったかも、知らずにいてはなりません。取税人は、目をあつかましく天に上げず、手を横柄に上げもせず、胸を打ちました。こうして、内に閉じこめていた罪を明かしながら、神のあわれみの助けを求めたのです。パリサイ人は自分に満足していましたが、このように願った取税人のほうが、聖とされるにふさわしかったのです。彼は、救いの望みを自分の潔白への頼みに置きませんでした。潔白な者は、だれもいないからです。かえって、罪を言い表して、へりくだって祈りました。そして、へりくだる者をゆるしてくださる方が、その祈りを聞き入れてくださったのです。6:2主は、福音書の中で、このことを述べておられます。ふたりの人が祈るために宮に上りました。ひとりはパリサイ人、ひとりは取税人でした。パリサイ人は立って、ひとりでこう祈りました。『神よ、わたしは、ほかの人たちのような不正な者、貪欲な者、姦淫をする者ではありません。また、この取税人のような人間でもありません。そのことを感謝します』（ルカ一八・一一〜一二）。6:3『わたしは一週に二度断食しており、全収入の十分の一をささげています』（ルカ一八・一二）。ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天にむけず、胸を打ちながら言いました。『神様、罪人のわたしをおゆるしください』（ルカ一八・一三）。6:4そして、こう言われます。『あなたがたに言っておく。義とされて自分の家に帰ったのは、この取税人であって、あのパリサイ人ではなかった。おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう』（ルカ一八・一四）。

7:1愛する兄弟たちよ、わたしたちは、このことを聖書の朗読から学び、どのように祈りに近づくべきかを知りました。今度は、主がお教えになるところから、何を祈るべきかも知りましょう。主は言われます。『こう祈りなさい。天にいますわたしたちの父よ、御名が聖とされますように。御国がきますように。みこころが天にも地にも行われますように。わたしたちの日ごとのパンを、きょうお与えください。わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしください。わたしたちが試みに引き入れられることを許さないで、悪からお救いください』（マタイ六・九〜一三）。

訳注

1 今の聖書では、前半を、近くの神にすぎないのかと問う形で読む。

2 エレミヤ書にはなく、ギリシア語訳の旧約にだけある手紙の言葉。

主の祈りについて　8～12章　わたしたちの父と御名

8:1 平和の教師であり一致の師である方は、何よりもまず、一人一人ばらばらの祈りをお望みになりませんでした。祈る人が自分のためだけに祈るような、自分だけの祈りをお望みにならなかったのです。わたしたちは、『天にいますわたしの父よ』とも、『わたしのパンを、きょうわたしにお与えください』とも言いません。また、一人一人が、自分の負債だけをゆるしてくださいと願うのでもありません。自分ひとりのために、試みに引き入れられず、悪から救われるようにと求めるのでもありません。8:2 わたしたちの祈りは、公の、共同の祈りです。わたしたちは祈るとき、一人のためではなく、民全体のために祈ります。民全体であるわたしたちは、一つだからです。平和と和合の師である神は、一致をお教えになりました。この方は、ご自身が、一人のうちにすべての者をお担いになりました。それと同じように、一人がすべての者のために祈ることをお望みになったのです。8:3 炉の火の中に閉じこめられた三人の若者は、この祈りの決まりを守りました。彼らは願いの声をそろえ、霊を一つにして和合していました。信頼すべき聖書が、このことを告げています。聖書は、このような人々がどのように祈ったかを教えて、わたしたちが願いの中で倣うべき手本を示しているのです。わたしたちも、このような者となることができるためです。8:4 聖書は言います。『そのとき、三人は一つの口から出るように、賛美の歌を歌い、神をほめたたえた』[1]（ダニエル三・五一）。彼らは、一つの口から出るように語っていました。キリストが、まだ彼らに祈ることをお教えになっていなかったときのことです。ですから、祈る彼らの言葉は、願いをかなえさせる、確かなものとなりました。平和で、素直で、霊的な祈りが、主に喜ばれたからです。8:5 使徒たちも、主が天に上られた後、弟子たちと共にこのように祈っていたことが分かります。聖書は言います。『彼らはみな、婦人たち、またイエスの母であったマリヤ、およびイエスの兄弟たちと共に、心を一つにして、ひたすら祈をしていた』（使徒一・一四）。8:6 彼らは、心を一つにして、ひたすら祈り続けました。そして、その祈りの熱心さと和合とによって、次のことを示しました。心を一つにする者たちを家に住まわせる神は、心を一つにして祈る人々だけを、神の永遠の家にお入れになるのです。

9:1 愛する兄弟たちよ、主の祈りの奥義は、どれほどのものでしょう。なんと多く、なんと大きいことでしょう。言葉としては短くまとめられていますが、力においては霊的に豊かです。それで、わたしたちの願いと祈りには、天の教えの要約として、何一つ漏れることなく、すべてが収められているのです。9:2 主は言われます。『こう祈りなさい。天にいますわたしたちの父よ』。新しい人、すなわち新しく生まれ、その恵みによって自分の神のもとに戻された人は、まず初めに『父よ』と言います。すでに子となり始めたからです。9:3 聖書は言います。『彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった。彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである』（ヨハネ一・一一～一二）。9:4 ですから、その名を信じて神の子となった者は、ここから始めなければなりません。感謝をささげ、天におられる神を自分の父と呼んで、自分が神の子であることを言い表すのです。また、生まれてすぐの最初の言葉で、証しもするのです。自分は地上の肉の父を捨て、天におられる父だけを知り、この方を父として持ち始めた、ということです。こう書いてあるとおりです。『彼らは父と母に向かって、あなたを知らないと言い、自分の子らを認めなかった。彼らはあなたのおきてにしたがい、あなたの契約を守った』（申命記三三・九）。9:5 また、主は福音書の中で、地上のだれをも父と呼んではならないとお命じになりました。わたしたちの父はただひとり、天におられる方だからです（マタイ二三・九）。また、亡くなった父のことを口にした弟子に、こうお答えになりました。『その死人を葬ることは、死人に任せておくがよい』（マタイ八・二二）。というのも、弟子は自分の父を死んだ者と言ったからです。けれども、信じる者たちの父は、生きておられる方です。

10:1 愛する兄弟たちよ、わたしたちが心にとめ、悟るべきことは、天におられる方を父と呼ぶことだけではありません。わたしたちは、言葉を添えて『わたしたちの父よ』と言います。すなわち、信じる者たちの父です。この方によって聖とされ、霊の恵みによる誕生で造り直されて、神の子となり始めた者たちの父です。10:2 この言葉は、ユダヤ人をも責め、打ちます。キリストは、預言者たちを通して彼らに告げ知らされ、まず彼らのところに遣わされた方でした。ところが彼らは、その方を不信仰にもないがしろにしただけでなく、残酷にも殺したからです。彼らは、もはや主を父と呼ぶことができません。主が彼らを恥じ入らせ、責めて、こう言われるからです。『あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者であって、その父の欲望どおりを行おうと思っている』（ヨハネ八・四四）。10:3 『彼は初めから、人殺しであって、真理に立つ者ではない。彼のうちには真理がないからである』（ヨハネ八・四四）。また、神は預言者イザヤを通して、お憤りになって叫ばれます。『わたしは子らを生み、高く上げた。しかし彼らはわたしをないがしろにした』（イザヤ一・二）。10:4 『牛はその飼主を知り、ろばはその主人のまぐさおけを知る。しかしイスラエルはわたしを知らず、民はわたしを悟らない。ああ、罪深い国びと、不義を負う民、悪をなす者のすえ、堕落せる子らよ』（イザヤ一・三〜四）。10:5 『あなたがたは主を捨て、イスラエルの聖者を怒らせた』（イザヤ一・四）。わたしたちキリスト者は、彼らをとがめるようにして、祈るとき『わたしたちの父よ』と言います。神は、すでにわたしたちの父となり始め、神を捨てたユダヤ人の父ではなくなったからです。10:6 罪人である民は、子であることができません。罪のゆるしを与えられた人々に、子という名が与えられ、その人々に、永遠にとどまることが約束されるのです。主ご自身が、こう言われるとおりです。『すべて罪を犯す者は奴隷である』（ヨハネ八・三四）。10:7 『そして、奴隷はいつまでも家にいる者ではない。子はいつまでもいる』（ヨハネ八・三五）。

11:1 主のいつくしみは、なんと大きいことでしょう。わたしたちに示されるへりくだりと優しさは、なんと豊かなことでしょう。わたしたちが神の御前で祈りをささげるとき、主を父と呼ぶようにと望んでくださったのです。キリストが神の子であるように、わたしたちも神の子と呼ばれるようにとお望みになったのです。主ご自身がこう祈ることを許してくださらなかったとしたら、だれも祈りの中でこの名にあえて触れはしないはずです。11:2 ですから、愛する兄弟たちよ、わたしたちは覚えておき、知っておかなければなりません。神を父と呼ぶからには、神の子らしくふるまわなければならないということです。わたしたちが父である神を喜んでいるのと同じように、神もわたしたちを喜んでくださるためです。11:3 わたしたちは、神の宮としてふるまいましょう。主がわたしたちのうちに住んでおられることが、はっきりするためです。わたしたちの行いが、霊にふさわしくない、劣ったものであってはなりません。霊の者、天の者となり始めたわたしたちが、霊のこと、天のことだけを思い、行うためです。主なる神ご自身が、こう言われたからです。『わたしを尊ぶ者たちを、わたしは尊び、わたしを卑しめる者たちは、軽んぜられるであろう』（サムエル記上二・三〇）。祝福された使徒も、その手紙の中にこう書きました。『あなたがたは、自分自身のものではない。大きな代価を払って買いとられたのだ。自分のからだをもって、神の栄光をあらわし、神を担いなさい』[2]（第一コリント六・一九〜二〇）。

12:1 その次に、わたしたちは『御名が聖とされますように』と言います。それは、わたしたちの祈りによって御名が聖とされるように、と神のために望むのではありません。神の御名がわたしたちのうちで聖とされるように、と主に求めるのです。12:2 そもそも、ご自身が聖としてくださる神を、だれが聖とすることができるでしょうか。しかし、神ご自身が、『あなたがたは聖なる者とならなければならない。わたしも聖なる者だからである』と言われました（レビ記一一・四四）。ですから、わたしたちは、このことを願い求めるのです。洗礼で聖とされたわたしたちが、なり始めたとおりの者であり続けることです。12:3 そして、わたしたちは、このことを毎日願います。わたしたちには、日ごとに聖とされることが必要だからです。毎日過ちを犯すわたしたちが、絶えず聖とされることによって、自分の過ちを清めるためです。神のへりくだりによってわたしたちに与えられる、聖とされることがどのようなものかを、使徒はこう説いています。『不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者は、いずれも神の国をつぐことはないのである』（第一コリント六・九〜一〇）。12:4 『あなたがた

は、たしかにそのような者であった。しかし、主イエス・キリストの名によって、またわたしたちの神の霊によって、洗われ、義とされ、聖とされたのである』（第一コリント六・一一）。使徒は、わたしたちが主イエス・キリストの名によって、またわたしたちの神の霊によって聖とされたと言っているのです。12:5 わたしたちは、この聖とされることが、わたしたちのうちにとどまるようにと祈ります。わたしたちの主であり審き主である方は、ご自分がいやし、生かしてくださった人を戒めておられます。もう罪を犯してはならない、何かもっと悪いことが起こらないために、と言われるのです（ヨハネ五・一四）。それで、わたしたちは、絶え間ない祈りの中でこの願いをささげます。神の恵みから受けた、聖とされることと生かされることが、神の守りによって保たれるようにと、昼も夜も求めるのです。

訳注

1 ダニエル書のギリシア語訳にだけある部分の言葉。
2 今の聖書には『神を担いなさい』の句はない。

主の祈りについて　13〜17章　御国とみこころ

13:1 祈りは続いて、『御国がきますように』と言います。わたしたちは、神の御名がわたしたちのうちで聖とされるように求めます。それと同じく、神の国もわたしたちに現されるようにと願うのです。そもそも、神が支配しておられない時など、あるでしょうか。また、常にあり、なくなることのないものが、神のもとで始まる時など、あるでしょうか。13:2 わたしたちが来るようにと願うのは、わたしたちの国です。神がわたしたちに約束してくださり、キリストの血と受難によって得られた国です。この世で以前は仕えていたわたしたちが、やがてキリストがお治めになるとき、王として治めるためです。キリストご自身が、こう約束して言われるとおりです。『わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい』（マタイ二五・三四）。13:3 愛する兄弟たちよ、キリストご自身が神の国であると取ることもできます。わたしたちは、この方が来てくださるよう日ごとに願い、その到来が早くわたしたちに現されることを望んでいるのです。というのも、キリストご自身がよみがえりであるのは、わたしたちがこの方のうちによみがえるからです。それと同じように、神の国もキリストご自身と解することができます。わたしたちは、この方のうちで王として治めることになるからです。13:4 わたしたちが神の国、すなわち天の国を願うのは、もっともなことです。地の国もあるからです。けれども、すでに世を捨てた者は、世の誉れよりも、世の国よりも大きいのです。13:5 ですから、自分を神とキリストにささげる者は、地の国ではなく、天の国を望みます。しかし、天の国から落ちないためには、絶えまない祈りと願いが必要です。ユダヤ人は、初めにこの国を約束されていたのに、そこから落ちてしまいました。主がこのことを明らかにし、証明しておられるとおりです。13:6 主は言われます。『多くの人が東から西からきて、天国で、アブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席につくが、御国の子らは外のやみに追い出され、そこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう』（マタイ八・一一〜一二）。13:7 主はこう示されたのです。ユダヤ人は、以前、神の子であり続けていたときには、御国の子らでした。けれども、彼らのもとで父という名が絶えると、御国も絶えたのです。ですから、わたしたちキリスト者は、祈りの中で神を父と呼び始めたので、神の国がわたしたちに来るようにとも祈るのです。

14:1 わたしたちは、さらに言葉を加えて、『みこころが天にも地にも行われますように』と言います。それは、神が望まれることを神がなさるように、ということではありません。神が望まれることを、わたしたちが行うことができるように、ということです。14:2 そもそも、神が望まれることをなさるのを、だれが妨げるでしょうか。しかし、わたしたちは悪魔に妨げられて、精神も行いも、すべてにおいて神に従うことができずにいます。ですから、わたしたちのうちにみこころが行われるようにと、祈り求めるのです。わたしたちのうちにみこころが行われるには、神のみこころ、すなわち神の助けと守りが要ります。だれも自分の力で強いのではなく、神のいつくしみとあわれみによって守られているからです。14:3 実際、主も、ご自分が担っておられた人間の弱さを示して、言われました。『父よ、もしできることでしたら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください』。そして、弟子たちに手本を示して、自分の思いではなく、神のみこころを行うように、こう言い添えられました。『しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころのままに』（マタイ二六・三九）。14:4 また、別のところでは、こう言われます。『わたしが天から下ってきたのは、自分のこころのままを行うためではなく、わたしをつかわされたかたのみこころを行うためである』（ヨハネ六・三八）。子が、父のみこころを行うためにお従いになったのなら、しもべは、主人の思いを行うために、なおさら従わなければなりません。ヨハネも、その手紙の中で、神のみこころを行うように勧め、教えて、こう言っています。『世と世にあるものとを、愛してはいけない』（第一ヨハネ二・一五）。14:5 『もし、世を愛する者があれば、父の愛は彼のうちにない。すべて世にあるもの、す

なわち、肉の欲、目の欲、世の誇は、父から出たものではなく、世の欲から出たものである』（第一ヨハネ二・一五～一六）。14:6『世と世の欲とは過ぎ去る。しかし、神のみこころを行う者は、神も永遠にながらえておられるように、永遠にながらえる』[1]（第一ヨハネ二・一七）。永遠にながらえたいと願うわたしたちは、永遠である神のみこころを行わなければなりません。

15:1 神のみこころとは、キリストがなさり、またお教えになったことです。それは、ふるまいにはへりくだり、信仰には揺るぎなさ、言葉には慎みがあることです。行いには義、わざにはあわれみ、生き方には教えを守る姿があることです。不正を加えることを知らず、加えられた不正は耐え忍ぶことができることです。兄弟たちと平和を保ち、心をつくして主を愛することです。主が父であることを愛し、神であることを恐れることです。キリストより何ものをも決して上に置かないことです。キリストも、わたしたちより何ものをも上にお置きにならなかったからです。キリストの愛に、離れることなく堅く付くことです。キリストの名と誉れをめぐって戦いがあるときには、雄々しく、確信をもって、キリストの十字架のそばに立つことです。言葉では告白をする堅さを、取り調べでは戦いに臨む確信を、死では冠を受ける忍耐を示すことです。これが、キリストと共同の相続人であろうと望むことです。これが、神のおきてを行うことです。これが、父のみこころを果たすことです。

16:1 わたしたちは、みこころが天にも地にも行われるように願います。この二つはどちらも、わたしたちの無事と救いが全うされることに関わっています。というのも、わたしたちは、体を地から、霊を天から持っているので、わたしたち自身が地であり、天だからです。それで、その両方に、すなわち体にも霊にも、神のみこころが行われるようにと祈るのです。16:2 というのも、肉と霊のあいだにはせめぎ合いがあり、互いに逆らい合うものどうしの戦いが、日ごとにあるからです。そのため、わたしたちは、自分でしようと思うことを、しないようになります。霊は天のこと、神のことを求めますが、肉は地のこと、世のことを欲するのです。16:3 ですから、わたしたちは、この二つのあいだに、神の助けと支えによって和合が生まれるようにと願います。霊にも肉にも神のみこころが行われて、神によって新しく生まれた魂が保たれるためです。16:4 使徒パウロは、このことを、自分の声ではっきりと明らかに告げています。『肉の欲するところは霊に反し、また霊の欲するところは肉に反する。こうして、二つのものは互に相さからい、その結果、あなたがたは自分でしようと思うことを、しないようになる』（ガラテヤ五・一七）。16:5『肉の働きは明白である。すなわち、姦淫、不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、まじない、殺人、敵意、争い、そねみ、怒り、挑み合い、反目、分裂、分派、ねたみ、泥酔、宴楽、およびそのたぐいである。このようなことを行う者は、神の国をつぐことがない』（ガラテヤ五・一九～二一）。16:6『しかし、霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、善意、忠実、柔和、自制、純潔である』（ガラテヤ五・二二～二三）。ですから、わたしたちは、日ごとの、いや、絶えまない祈りによって願うのです。天にも地にも、わたしたちについて神のみこころが行われるように、と。地のものが天のものに譲り、霊のもの、神のものがまさること、これが神のみこころだからです。

17:1 愛する兄弟たちよ、次のように解することもできます。主は、敵をも愛し、わたしたちを迫害する者のためにも祈るようにと、お命じになり、お勧めになります（マタイ五・四四）。ですから、わたしたちは、まだ地であって、天の者となり始めていない人々のためにも願うのです。その人々についても、神のみこころが行われるように、と願うのです。それは、キリストが、人を守り、回復させることによって成し遂げてくださったみこころです。17:2 というのも、弟子たちは、主によって、もはや地ではなく、地の塩と呼ばれています（マタイ五・一三）。また、使徒は、第一の人を地の土から出た者と呼び、第二の人を天から来る者と呼んでいます（第一コリント一五・四七）。わたしたちは、父である神に似た者とならなければなりません。神は、良い者の上にも悪い者の上にも太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださいます（マタイ五・四五）。ですから、わたしたちがキリストの勧めに従って祈り求めるのは、もっともなことです。すべての人の救いのために願いをささげるのです。天で、すなわちわたしたちのうちでは、わたしたちの信仰によって神のみこころが行われました。わたしたちが天から出た者となるためです。それと同じように、地でも、すなわち信じようとしない者たち[2]のうちでも、神のみこころが行われるよ

うにと願うのです。最初の誕生によってまだ地の者である人々が、水と霊とから生まれて、天の者となり始めるためです。

訳注

1 今の聖書には『神も永遠にながらえておられるように』の句はない。
2 伝わる写本はみな『信じる者たち』と読む。

主の祈りについて　18〜21章　日ごとのパン

18:1 祈りは進んで、わたしたちはこう願い求めて言います。『わたしたちの日ごとのパンを、きょうお与えください』。これは、霊の意味にも、字のとおりの意味にも解することができます。どちらの取り方も、神から与えられる益によって、救いのために役立つからです。18:2 というのも、キリストは命のパンだからです。このパンは、すべての人のものではなく、わたしたちのものです。わたしたちは『わたしたちの父』と言います。神が、悟る者たちと信じる者たちの父だからです。それと同じように、『わたしたちのパン』とも呼びます。キリストは、その体に触れるわたしたちのパンだからです。18:3 わたしたちは、このパンが日ごとに与えられるように願います。わたしたちはキリストのうちにいて、救いの食べ物として、日ごとにキリストの聖餐を受けています。そのわたしたちが、キリストの体から引き離されることのないためです。何かより重い過ちが間に入れば、わたしたちは聖餐から遠ざけられます。そして、交わりにあずからない者として、天のパンから締め出されてしまいます。主ご自身が、こう告げて言われるとおりです。『わたしは天から下ってきた命のパンである』（ヨハネ六・五一）。18:4 『わたしのパンを食べる者は、いつまでも生きるであろう。わたしが与えるパンは、世の命のためのわたしの肉である』（ヨハネ六・五一）。主は、ご自分のパンを食べる者はいつまでも生きる、と言われます。ですから、キリストの体に触れ、交わりの権利によって聖餐を受ける者が生きることは、明らかです。それと同じように、逆に、恐れ、また祈らなければなりません。遠ざけられた者が、キリストの体から引き離されて、救いから離れたままでいることのないようにです。主ご自身が、こう警告して言われます。『人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はないであろう』（ヨハネ六・五三）。18:5 ですから、わたしたちは、わたしたちのパン、すなわちキリストが、日ごとに与えられるように願うのです。わたしたちはキリストのうちにとどまり、生きています。そのわたしたちが、キリストによって聖とされることからも、キリストの体からも離れないためです。

19:1 また、次のように解することもできます。わたしたちは世を捨て、霊の恵みへの信仰によって、世の富も華やかさも投げ捨てました。そのわたしたちは、自分のためには食べ物と糧だけを願うのだ、ということです。主が、こう教えて言われるからです。『自分のものをことごとく捨て切るものでなくては、わたしの弟子となることはできない』（ルカ一四・三三）。19:2 自分の師の言葉に従ってすべてを捨て、キリストの弟子となり始めた者は、その日の食べ物を願うべきです。願いの望みを、先々まで延ばしてはなりません。主ご自身が、ふたたびこう命じて言われるとおりです。『あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう』（マタイ六・三四）。19:3 『一日の苦労は、その日一日だけで十分である』（マタイ六・三四）。ですから、キリストの弟子が、その日の分の糧を自分のために願うのは、もっともなことです。弟子は、あすのことを思いわずらうのを禁じられているからです。また、わたしたちは、神の国が速やかに来るようにと願っています。そのわたしたちが世で長く生きることを求めるなら、自分自身に反し、食い違うことになるからです。19:4 祝福された使徒も、そのように勧めて、わたしたちの望みと信仰の堅さを形づくり、強めています。彼は言います。『わたしたちは、何ひとつ持たないでこの世にきた。また、何ひとつ持って出ることもできない』（第一テモテ六・七）。『だから、衣食があれば、わたしたちはそれで足りている』（第一テモテ六・八）。19:5 『富むことを願い求める者は、誘惑と、わなとに陥る。また、人を滅びと破壊とに沈ませる、恐ろしいさまざまの情欲に陥るのである』（第一テモテ六・九）。『金銭を愛することは、すべての悪の根である。ある人々は欲ばって金銭を求めたため、信仰の破船に会い、多くの苦痛をもって自分自身を刺しとおした』（第一テモテ六・一〇）。

20:1 使徒は、富がさげすむべきものであるだけでなく、危ういものでもあると教えています。そこには悪の根がある、と言うのです。その悪は甘く誘い、人の思いの盲目につけこんで、隠れた欺きでだますのです。ですから、神も、愚かな金持ちをおとがめになりました。その金持ちは、世の富を思いめぐらし、あり余る作物の豊かさを誇っていました。神は言われます。『愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう』（ルカ一二・二〇）。20:2 『そしたら、あなたが用意した物は、だれのものになるのか』（ルカ一二・二〇）。愚かな者は、その夜のうちに死ぬというのに、作物を喜んでいました。いのちがもう欠けようとしているのに、あり余る糧のことを思いめぐらしていたのです。これに対して、主はこうお教えになります。自分の持ち物をみな売り払い、貧しい人々に施す者は、天に自分の宝をたくわえます。その者が、完全で、全き者となるのです（マタイ一九・二一）。20:3 主は、こうも言われます。ご自分に従い、ご自分の受難の栄光に倣うことができるのは、身軽で、腰に帯を締めた者です。その者は、財産のどんなわなにも絡め取られません。解き放たれて自由になり、先に主のもとへ送っておいた自分の富に、自分もついて行くのです。20:4 わたしたち一人一人は、それに備えることができるように、こう祈ることを学びます。そして、祈りの決まりから、自分がどのような者であるべきかを知るのです。

21:1 というのも、正しい者に日ごとの食べ物が欠けることは、ありえないからです。こう書いてあるからです。『主は正しい人を飢えさせない』（箴言一〇・三）。また、こうも書いてあります。『わたしは、むかし年若かった時も、年老いた今も、正しい人が捨てられ、あるいはその子孫が食物を請いあるくのを見たことがない』（詩篇三七・二五）。主も、こう約束して言われるからです。『何を食べようか、何を飲もうか、あるいは何を着ようかと言って思いわずらうな』（マタイ六・三一）。21:2 『これらのものは、異邦人が切に求めているものである。あなたがたの父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要であることをご存じである』（マタイ六・三二）。『まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう』（マタイ六・三三）。主は、神の国と神の義とを求める者には、すべてが添えて与えられると約束しておられます。21:3 というのも、すべては神のものなので、神を持つ者には、何も欠けることがないからです。ただし、その人自身に、神に対して欠けるところがなければです。こうして、ダニエルが王の命令でししの穴に閉じ込められたときには、神によって食事が備えられました[1]。神の人は、飢えていながら手を出さない獣たちのあいだで、養われたのです。21:4 こうしてエリヤも、逃れて荒野にいたとき、からすに仕えられて養われました。迫害の中で、鳥たちが食べ物を運んできて、彼を養ったのです。それなのに、ああ、人の悪意の、なんと憎むべき残酷さでしょう！　獣は手を出さず、鳥は養うのに、人は待ち伏せをして、荒れ狂うのです。

訳注

1　ししの穴で食事を与えられる話は、ダニエル書のギリシア語訳にだけある。

主の祈りについて　22〜27章　負債のゆるしと試み

22:1 この後、わたしたちは自分の罪のためにも願い求めて、こう言います。『わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしください』。食べ物の助けの後に、過ちのゆるしが願われるのです。神に養われる者が、神のうちに生きるためです。また、今のこの時のいのちだけでなく、永遠のいのちのためにも心を配るためです。永遠のいのちには、罪が免じられれば、たどり着くことができます。主は、この罪を負債と呼ばれます。ご自分の福音の中で、こう言われるとおりです。『わたしに願ったからこそ、負債を全部ゆるしてやったのだ』（マタイ一八・三二）。22:2 わたしたちは、罪のために願うよう強いられています。そのことで、自分が罪人であることを思い起こさせられるのです。それは、なんと必要で、なんと行き届いた、救いに役立つ勧めでしょう。神からいつくしみを願い求めるときに、精神が自分の良心を思い起こすためです。22:3 人は、毎日罪のために祈るように命じられることで、自分が毎日罪を犯していることを教えられ、学びます。だれも、潔白な者であるかのように自分に満足し、自分を高くして、なおさら滅びることのないためです。こうしてヨハネも、その手紙の中で、こう勧めて言います。『もし、罪がないと言うなら、それは自分を欺くことであって、真理はわたしたちのうちにない』（第一ヨハネ一・八）。22:4 『もし、わたしたちが自分の罪を言い表すならば、主は真実で正しく、わたしたちの罪をゆるしてくださるかたである』（第一ヨハネ一・九）。ヨハネは手紙の中で、その両方をまとめて述べました。わたしたちは罪のために願わなければならないこと、そして、願うときにはいつくしみをいただけることです。22:5 ですから、ヨハネは主を真実な方と呼びました。罪をゆるすために、ご自分の約束に対する真実をお守りになる方だというのです。主は、わたしたちに負債と罪のために祈るよう教えてくださいました。その方が、父のあわれみと、祈りに続くゆるしとを約束してくださったからです。

23:1 さらに主は、はっきりと決まりをお付け加えになりました。確かな条件と誓約によって、わたしたちをつなぎとめておられるのです。わたしたちは、自分も負債のある者をゆるすのに応じて、自分の負債をゆるしていただくように願う、というのです。わたしたちは知っています。わたしたち自身も、自分に罪を犯した者たちに同じようにしたのでなければ、罪のために願うことは聞き入れていただけないのです。23:2 そのため、主はほかのところでも、こう言われます。『あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられるであろう』（マタイ七・二）。また、主人に負債を全部ゆるしてもらったのに、自分は仲間をゆるそうとしなかったしもべは、獄に入れられます。23:3 仲間をゆるそうとしなかったので、主人から自分にゆるされていたものを失ったのです。キリストは、ご自分のおきての中で、このことをさらに強くお示しになります。ご自分の懲らしめの、いっそう大きな厳しさをもってです。こう言われるのです。『また立って祈るとき、だれかに対して、何か恨み事があるならば、ゆるしてやりなさい。そうすれば、天にいますあなたがたの父も、あなたがたの罪をゆるしてくださるであろう』（マルコ一一・二五）。23:4 『もしあなたがたがゆるさないならば、天にいますあなたがたの父も、あなたがたの罪をゆるしてくださらないであろう』（マルコ一一・二六）。裁きの日には、あなたに言い逃れは何も残りません。あなたは自分の下した判決によって裁かれ、自分がしたことを、自分も受けることになるからです。23:5 というのも、神はお命じになったからです。ご自分の家で、わたしたちが平和をつくり出す者、和合する者、心を一つにする者であるようにと。神は、第二の誕生によって、わたしたちをそのような者にしてくださいました。新しく生まれたわたしたちが、そのままの者としてとどまり続けることを、お望みになるのです。神の子であるわたしたちが、神の平和のうちにとどまるためです。また、霊が一つである者たちには、精神も考えも一つであるためです。23:6 同じように、神は、争っている者の供え物をお受けになりません。祭壇から

引き返す者に、まず兄弟と和解するようにお命じになるのです（マタイ五・二三〜二四）。平和をつくり出す者の願いによって、神もまた和らいでくださるためです。神へのより大きな供え物は、わたしたちの平和と兄弟の和合、そして、父と子と聖霊の一致によって一つに集められた民です。

24:1 というのも、アベルとカインが初めて供え物をささげたとき、神がご覧になったのは、二人のささげ物ではなく、心だったからです。こうして、心において神に喜ばれていた者が、ささげ物においても喜ばれたのです。24:2 平和をつくり出す正しい人アベルは、潔白な心で神に供え物をささげることで、ほかの人々にも教えました。祭壇にささげ物を携えて来るときには、このように来るべきだというのです。神を恐れ、素直な心を持ち、義の決まりに従い、和合の平和を保って来るのです。24:3 神に供え物をささげるときにこのような者であったアベルが、後に自分自身が神への供え物となったのは、当然のことでした。主の義と平和を持っていた彼は、最初に殉教を示し、自分の血の栄光によって、主の受難の始まりとなったのです。24:4 こうして、このような人々が主から冠を受けるのです。裁きの日に、主と共にその血の報復がなされるのも、このような人々のためです。しかし、和合せず、争い、兄弟たちと平和を持たない者もいます。その者は、たとえ御名のために殺されたとしても、兄弟との不和の罪を逃れることはできません。祝福された使徒と聖書が証ししているとおりです。こう書いてあるからです。『兄弟を憎む者は人殺しである』（第一ヨハネ三・一五）。人殺しは、御国にたどり着くことも、神と共に生きることもありません。24:5 キリストに倣う者であるよりも、ユダに倣う者であることを選んだ者は、キリストと共にいることはできません。血の洗礼によってさえ洗い落とせない過ちとは、なんという過ちでしょう。殉教によってさえ償えない罪とは、なんという罪でしょう！

25:1 主は、これも必要なこととして、祈りの中でこう言うようにお勧めになります。『わたしたちが試みに引き入れられることを許さないで』。この句では、神が先にお許しにならなければ、敵対者はわたしたちに対して何もできないことが示されています。わたしたちの恐れも、献身も、従順も、すべて神に向けられるためです。試みの中では、神から力が与えられなければ、悪には何も許されないからです。25:2 聖書は、こう言ってそのことを証明しています。『バビロンの王ネブカデネザルはエルサレムにきて、これを攻め囲んだ。主はこれを彼の手にわたされた』（列王紀下二四・一一、ダニエル一・一〜二）。わたしたちに対する力が悪に与えられるのは、わたしたちの罪に応じてです。こう書いてあるとおりです。『ヤコブを奪わせ、かすめる者にイスラエルをわたした者はだれか』（イザヤ四二・二四）。25:3 『これは神ではないか。彼らは神にむかって罪を犯し、その道に歩むことを好まず、またその律法に聞き従うことを好まなかった。それゆえ、神は激しい怒りを彼らに臨ませられた』（イザヤ四二・二四〜二五）。また、ソロモンが罪を犯し、主のおきてと道から離れたときにも、こう記されています。『主はソロモン自身に対してサタンを起された』[1]（列王紀上一一・一四）。

26:1 わたしたちに対する力は、二つの仕方で与えられます。わたしたちが過ちを犯すときには罰のために、試されるときには栄光のためにです。ヨブのことでそうなったのを、わたしたちは見ています。神ご自身がそれを明らかにして、こう言われました。『見よ、彼のすべての所有物をあなたの手にわたす。ただ彼の身に手をつけてはならない』（ヨブ記一・一二）。26:2 また主も、受難のときに、福音の中でこう言われます。『あなたは、上から賜わるのでなければ、わたしに対してなんの力もない』（ヨハネ一九・一一）。わたしたちは、試みに陥らないようにと願います。こう願うとき、わたしたちは自分の弱さともろさを思い起こさせられるのです。だれも思い上がって自分を高くしないためです。だれも高ぶり、おごって、何かを自分のものとしないためです。だれも、告白や殉教の栄光を、自分のものとみなさないためです。主ご自身も、へりくだりを教えて、こう言われたからです。『試みに陥らないように、目をさまして祈っていなさい。心は熱しているが、肉体が弱いのである』（マタイ二六・四一）。それは、恐れと神への敬いをもってひれ伏して願い求めることがみな、神ご自身の慈愛によってかなえられるためです。へりくだり身を低くした言い表しが先に立ち、すべてが神に帰されるとき、そうなるのです。

27:1 これらすべての後、祈りの終わりに、結びの句が来ます。それは、わたしたちのすべての求めと願いを、短くまとめて締めくくるものです。というのも、わたしたちは最後にこう唱えるからです。『悪からお救いください』。こう言って、敵がこの世界でわたしたちに対して企てる、あらゆる災いを含めるのです。

神がわたしたちをお救いくださるなら、それらに対して、堅く頼もしい守りがありえます。願い求め、すがるわたしたちに、神が助けをお与えくださるなら、そうなのです。27:2 わたしたちが『悪からお救いください』と言うとき、そのうえさらに願い求めるべきものは、何も残っていません。悪に対する神の守りを、ひとたび願い求めたからです。それを聞き入れていただけば、わたしたちは、悪魔と世界が引き起こすすべてのものに対して、安らかに、守られて立つのです。27:3 世の中で神を守り手としている者に、世からの恐れさえ、どこにあるでしょうか。

訳注

1 今の聖書では、サタンでなく、ソロモンの敵を起こすと読む。

主の祈りについて　28〜31章　短い祈りと、目をさまして祈ること

28:1 愛する兄弟たちよ、神がお教えになった祈りがこのようなものであっても、何の不思議があるでしょうか。神は、ご自分の教えによって、わたしたちの願いのすべてを、救いの言葉のうちに短くまとめてくださったのです。このことは、すでに預言者イザヤを通して、前もって告げられていました。イザヤが聖霊に満たされて、神の威光と慈愛について語ったときのことです。28:2『言葉を成し遂げ、義のうちに短くする。神は、短くされた言葉を全地に行われるからである』[1]（イザヤ一〇・二二〜二三）。というのも、神の言葉であるわたしたちの主イエス・キリストは、すべての人のもとに来られました。学ある者も学のない者も等しく集め、男にも女にも、どの年齢の者にも、救いのおきてをお授けになりました。そのとき、主はご自分のおきてを、一つの大きな要約になさったからです。天の教えを学ぶ者の記憶が、骨折らずに済むためです。素直な信仰に必要なことを、すばやく学べるためです。28:3こうして主は、永遠のいのちとは何かをお教えになりました。そのとき、いのちの奥義を、神ならではの大いなる短さのうちにまとめて、こう言われたのです。『永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります』（ヨハネ一七・三）。28:4また、律法と預言者から第一の、最も大きないましめをお選びになったときには、こう言われました。『イスラエルよ、聞け。主なるあなたの神は、ただひとりの主である』。また、『心をつくし、精神をつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ』（マルコ一二・二九〜三〇）。28:5『これが第一である。第二もこれと同様で、自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。これらの二つのいましめに、律法全体と預言者とが、かかっている』（マルコ一二・三一、マタイ二二・三八〜四〇）。さらに、こうも言われました。『何事でも人々からしてほしいと望む良いことは、人々にもそのとおりにせよ。これが律法であり預言者である』（マタイ七・一二）。

29:1 神は、言葉だけでなく行いによっても、わたしたちに祈ることをお教えになりました。ご自身がたびたび祈り、願い求めて、わたしたちがなすべきことを、ご自分の模範によって証ししながらお示しになったのです。こう書いてあるとおりです。『しかしイエスは、寂しい所に退いて祈っておられた』（ルカ五・一六）。また、『イエスは祈るために山へ行き、夜を徹して神に祈られた』（ルカ六・一二）。29:2罪のなかった方が祈っておられたのなら、罪人はなおさら祈らなければなりません。その方は、夜通し絶えず目をさまし、願いを重ねて祈っておられました。それなら、わたしたちは、たびたび祈りながら、なおさら夜、目をさましていなければならないのです！

30:1 主が祈り、願っておられたのは、ご自分のためではありませんでした。潔白な方が、どうしてご自分のために願い求めることがあるでしょうか。主は、わたしたちの過ちのために祈っておられたのです。主ご自身も、ペテロにこう言われるとき、それを明らかにしておられます。『見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願っていた』（ルカ二二・三一）。30:2『しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った』（ルカ二二・三二）。その後で、主はすべての人のために父に願い求めて、こう言われます。『わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じる人々のためにも、お願いいたします。父よ、それは、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が一つとなるためであります。すなわち、彼らをもわたしたちのうちにおらせるためであります』（ヨハネ一七・二〇〜二一）。30:3わたしたちの救いのための神の恵み深さと慈愛は、なんと大きいことでしょう。神は、ご自分の血によってわたしたちを贖うだけでは満足なさらず、さらにわたしたちのために願ってさえくださったのです。願っておられた方の望みが何であったかを見なさい。父と子が一つであるように、わたしたちもまさにその一致のうちにとどまることでした。ここからも、一致と平

和を裂く者が、どれほど大きな過ちを犯しているかがわかります。主は、このことのために、お願いまでなさったからです。つまり、主は、ご自分の民が生きることをお望みになったのです。不和は神の国にたどり着かないことを、ご存じだったからです。

31:1 愛する兄弟たちよ、立って祈るときには、心をつくして目をさまし、願いに打ち込まなければなりません。肉の思いも世の思いも、みな去らせましょう。精神が、願い求めているそのことだけを考え、ほかは何も考えないようにしましょう。31:2 そのため、祭司も、祈りの前に前置きの言葉を述べて、兄弟たちの思いを整えます。「心を上に」と言うのです。民が「主に向けています」と答えるときに、自分は主のほかは何も考えてはならないと、思い起こさせられるためです。31:3 胸は、敵対者に対しては閉ざされ、神にだけ開かれていなければなりません。祈りのときに、神の敵が胸に近づくのを許してはなりません。敵は、しばしば忍び寄って入り込み、巧みに欺いて、わたしたちの願いを神からそらすからです。こうして、わたしたちは、心には一つのことを、声には別のことを持つようになります。しかし、まじりけのない心の向きで主に祈るべきなのは、声の響きではなく、精神と考えなのです。31:4 あなたが主に願い求めているときに、愚かで俗な思いに心がそれて、とらわれてしまう。それは、なんという怠慢でしょう。神と語り合っていることよりも、もっと考えるべきことがあるかのようです。31:5 あなたは、自分で自分の言葉を聞いていないのに、どうして神に聞いていただくことを求めるのですか。自分で自分を心に留めていないのに、願うときに主があなたを心に留めてくださることを望むのですか。これは、敵に対して全く用心しないことです。神に祈りながら、祈りをなおざりにして、神の威光を傷つけることです。目では目をさましていながら、心では眠っていることです。キリスト者は、目では眠っているときにも、心では目をさましていなければならないのです。雅歌の中で、教会が語る言葉として、こう書いてあるとおりです。『わたしは眠っていても、心は目をさましている』（雅歌五・二）。31:6 そのため、使徒は、心を配り、注意深くこう勧めて言います。『目をさまして、ひたすら祈り続けなさい』（コロサイ四・二）。こうして使徒は教え、示しているのです。神に求めるものをかなえていただけるのは、祈りの中で目をさましていると神がご覧になる人々だ、ということです。

訳注

1 今の聖書では、言葉でなく、定められた滅びを全地に行うと読む。

主の祈りについて　32〜36章　わざを伴う祈りと、祈りの時

32:1 祈る者は、実を結ばない願いや、何も伴わない願いを携えて神のもとに来てはなりません。実を結ばない祈りで神に願い求めても、その願いは確かな力を持ちません。というのも、実を結ばない木は、みな切られて火に投げ込まれるからです。それと同じように、実を結ばない言葉も、神に喜ばれることはできません。施しのわざによって実り豊かになっていないからです。32:2 それで聖書は、こう教えて言います。『断食と施しとを伴う祈りは良い』（トビト一二・八）。というのも、裁きの日に、わざにも施しにも報いを与えてくださる方がおられます。その方は、きょうも、施しのわざを携えて祈りに来る者に、恵み深く耳を傾けてくださるからです。32:3 こうして、百卒長コルネリオも、祈っていたときに、神に聞いていただくにふさわしい者となりました。彼は、民に多くの施しをし、いつも神に祈っていました。第九時ごろ、祈っていた彼のそばに御使いが立ちました。そして、彼のわざを証しして、こう言いました。『コルネリオよ、あなたの祈や施しは神のみ前に上って、おぼえられている』（使徒一〇・三〜四）。

33:1 祈りは、わたしたちのわざの値うちによって神のもとへ運ばれるとき、すぐに神のもとに上ります。こうして、御使いラファエルも、いつも祈り、いつも施しのわざを行っていたトビトのそばに立って、こう言いました。『神のみわざを明らかにし、言い表すのは、誉れあることである』（トビト一二・一一）。33:2 『あなたとサラが祈っていたとき、わたしは、あなたがたの祈りの記念を、神の栄光の前にささげた。あなたは、素直な心で死者を葬っていた。ためらわずに立ち上がり、食事を置いて出て行き、死人を葬った。それで、わたしはあなたを試すために遣わされた。また神は、あなたと、あなたの嫁サラをいやすために、再びわたしをお遣わしになった』（トビト一二・一二〜一四）。33:3 『わたしはラファエルであって、神の栄光の前に立ち、そこに住む七人の正しい御使いの一人である』（トビト一二・一五）。主も、イザヤを通して、同じようなことを証しして、勧め、教えておられます。『不正の結び目をことごとく解き、暴虐な取り引きの締めつけをほどけ。打ちひしがれた者を放して休ませ、不正な証文をことごとく破り捨てよ。飢えた者に、あなたのパンを分け与え、家のない貧しい者を、あなたの家に入れよ。裸の者を見たら、これを着せ、あなたの血筋の家の者を軽んじてはならない』（イザヤ五八・六〜七）。33:4 『そのとき、あなたの光が暁のようにあらわれ出て、あなたの着物はすみやかに生じ[1]、義はあなたの前に行く。神の栄光があなたを取り囲む。そのとき、あなたが叫ぶと、神はあなたの声を聞き入れられる。あなたがまだ語っているうちに、見よ、わたしはここにいる、と言われる』（イザヤ五八・八〜九）。33:5 神は、ご自分がそばにいると約束し、その人々の願いを聞いて守ると言われます。それは、心にある不正の結び目を解き、神のおきてに従って、神の家の者に施しをする人々です。神が行うようにとお命じになることを聞くので、その人々も、神に聞いていただくにふさわしい者となるのです。33:6 祝福された使徒パウロは、苦難のさなかに困窮して、兄弟たちに助けられました。そのとき、こうして行われるわざは神への供え物だと言いました。『わたしは、エパフロデトから、あなたがたの贈り物をいただいて、飽き足りている。それは、かんばしいかおりであり、神の喜んで受けて下さる供え物である』（ピリピ四・一八）。33:7 というのも、貧しい者をあわれむ人は神に貸すのであり、最も小さい者に与える人は神に贈るのです。そうであれば、その人は、霊において、かんばしいかおりを神にささげていることになるからです。

34:1 祈りを行うことについては、ダニエルと共に三人の若者が、祈りの時を守っていたことがわかります。第三時、第六時、第九時、すなわち今の午前九時、正午、午後三時です。三人は、信仰に強く、捕囚の中で勝利を得た人々でした。そうしたのは、終わりの時に明らかにされることになっていた三位一体の奥義のためでした。34:2 というのも、第一時から第三時に至ると、三位一体の完全な数が示されます。また、第四時から第六時へ進むと、もう一つの三が示されま

す。そして、第七時から第九時までが満ちると、三時間ずつで、完全な三位一体が数えられるのです。34:3神に祈る者たちは、ずっと前から、これらの時の区切りを霊において定め、願いのための決まった正しい時を守って仕えていました。昔の正しい人々がこのように願い求めていたことのうちに奥義があったことは、後になって明らかにされました。34:4というのも、第三時には、弟子たちの上に聖霊が下り、主の約束の恵みを実現してくださったからです。また、ペテロは、第六時に屋上に上りました。そのとき、しるしと、さとす神の声とによって、すべての人を救いの恵みに受け入れるようにと教えられたのです。それまでは、異邦人を清めることについて迷っていたのです。34:5そして主は、第六時に十字架につけられ、第九時に、ご自分の血によってわたしたちの罪を洗い清めてくださいました。わたしたちを贖い、生かすことがおできになるように、そのとき、ご自分の受難によって勝利を成し遂げてくださったのです。

35:1しかし、愛する兄弟たちよ、わたしたちには、昔から守られてきた祈りの時のほかに、今は時の区切りも奥義も増し加わりました。というのも、朝にも祈らなければならないからです。主の復活を、朝の祈りによって祝うためです。35:2このことを、聖霊は、かつて詩篇の中でこう言って示しておられました。『わが王、わが神よ、主よ、朝に、わたしはあなたに祈ります。あなたはわたしの声を聞き入れられます。朝に、わたしはあなたの前に立ち、あなたを見ます』（詩篇五・二〜三）。35:3また、主は、預言者を通して、再びこう語られます。『夜明けに、彼らはわたしに向かって目をさまし、こう言う。さあ、わたしたちの神、主に帰ろう』[2]（ホセア五・一五〜六・一）。同じように、太陽が退き、日が終わるときにも、必ずまた祈らなければなりません。35:4というのも、キリストはまことの太陽であり、まことの日だからです。この世の太陽と日が退いていくときに、わたしたちは祈り、光が再びわたしたちの上に来るようにと求めます。そのとき、わたしたちは、キリストが来られて永遠の光の恵みを与えてくださることを、願い求めているのです。35:5キリストが日と呼ばれていることを、聖霊は詩篇の中で明らかにしておられます。『家造りらの捨てた石は隅のかしら石となった。これは主のなされた事でわれらの目には驚くべき事である』（詩篇一一八・二二〜二三）。35:6『これは主が設けられた日であって、われらはこの日に喜び祝おう』（詩篇一一八・二四）。また、キリストが太陽と呼ばれていることを、預言者マラキが証しして言います。『しかし主の名を恐れるあなたがたには、義の太陽がのぼり、その翼には、いやす力を備えている』（マラキ四・二）。35:7聖書の中で、まことの太陽、まことの日とはキリストのことです。そうであるなら、キリスト者には、神に祈ることを免れる時は一つもありません。たびたび、またいつも、神に祈らなければならないのです。それは、キリストのうちに、すなわちまことの太陽と日のうちにいるわたしたちが、一日じゅう願いに励み、祈るためです。この世界の決まりに従って巡る夜が、かわるがわる戻って来ても、祈る者には、夜の闇から害が及ぶことはありえません。光の子らには、夜にも日があるからです。35:8心に光を持つ人が、いつ光なしでいることがあるでしょうか。キリストを太陽とし、日とする人に、太陽と日がない時があるでしょうか。

36:1キリストのうちに、すなわち光のうちに、いつもいるわたしたちは、夜にも祈りをやめないようにしましょう。このように、やもめのアンナも、絶え間なく願い、いつも目をさまして、神に喜ばれることを続けていました。福音書にこう書いてあるとおりです。『宮を離れずに夜も昼も断食と祈とをもって仕えていた』（ルカ二・三七）。36:2まだ照らされていない異邦人のことも、光に見捨てられて闇の中にとどまっているユダヤ人のことも、もう問いません。愛する兄弟たちよ、わたしたちは、いつも主の光のうちにいる者です。恵みを受けて何となり始めたかを覚え、しっかりと保っている者です。ですから、夜を日と見なしましょう。36:3わたしたちはいつも光の中を歩むのだと信じましょう。逃れてきた闇に妨げられないようにしましょう。夜の時に願いが失われることのないようにしましょう。祈りが、怠けて、だらしなくむだにされることのないようにしましょう。神のいつくしみによって霊において造り直され、新しく生まれたわたしたちは、やがてなる者に倣いましょう。御国では、夜が入り込むことなく、ただ日だけを持つことになるのですから、夜も、光の中にいるように目をさましていましょう。いつも祈り、神に感謝することになるのですから、ここでも、祈ることと感謝することをやめないようにしましょう。

訳注

1 今の聖書では、着物でなく、すみやかにいやされると読む。

2 今の聖書では、夜明けにでなく、悩みの中で尋ね求めると読む。

小品集

2026年11月23日版
著者　キプリアヌス
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/cyprian-treatises/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/cyprian-treatises
全文を、ラテン語原文（Ad Donatum, De catholicae ecclesiae unitate, De lapsis, De dominica oratione）からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC0 1.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。